

百目鬼遺跡
樋渡遺跡
発掘調査報告書

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

ど
百 目 鬼 遺 跡

ひ
樋 渡 遺 跡

発掘調査報告書

平成 14 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、百目鬼遺跡・樋渡遺跡の調査成果をまとめたものです。

両遺跡は県中央部東寄り、山形盆地の南部に位置する県都山形市の南西部に所在します。この地区は、県下でも有数のブドウの産地ですが、近年の宅地造成や道路網の整備などで田園都市へと変貌を遂げています。

この度、東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事に伴い、工事に先立って百目鬼遺跡、樋渡遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良・平安時代の集落跡が確認され、当時の生活の痕跡を示す貴重な資料が得られました。特に、樋渡遺跡から出土した緑釉陶器は、当地と東海地方との交易があったことを推測させる注目すべき資料です。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木村 宰

例　　言

- 1 本書は東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）建設工事に係る「百目鬼遺跡」「樋渡遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団東北支社の委託を受けて、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	① 百目鬼遺跡　　遺跡番号 113
	② 樋渡遺跡　　遺跡番号 平成2年度登録
所　在　地	① 山形県山形市大字百目鬼
	② 山形県山形市大字富神台字樋渡
調　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受　託　期　間	平成10年4月1日～平成14年3月31日
現　地　調　査	(第1次調査) ① 平成10年4月10日～平成10年5月8日 ② 平成10年4月10日～平成10年5月8日
	(第2次調査) ① 平成10年7月27日～平成10年10月21日 ② 平成10年7月9日～平成10年7月31日
調　査　担　当　者	(第1次調査) 調査第一課長 佐藤 庄一 主任調査研究員 佐藤 正俊（現調査第三課長） 調査研究員 鈴木 徹 調査研究員 斎藤也寸志 調査研究員 斎藤 主税（現主任調査研究員） 調　　査　員 志田 純子 調　　査　員 須賀井明子 (第2次調査) 調査第一課長 佐藤 庄一 主任調査研究員 佐藤 正俊（現調査第三課長） 調査研究員 氏家 信行（現主任調査研究員） 調査研究員 渡部 利之 調　　査　員 衣袋 忠雄 調　　査　員 佐藤 正俊 整理担当者 調査第三課長 佐藤 正俊 主任調査研究員 氏家 信行
4	発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県教育庁文化財課、山形県土木部高速道路整備推進室、山形県山形建設事務所高速道路用地対策課、東南村山教育事務所、山形市教育委員会、最上川中流土地改良区等関係機関にご協力をいただいた。また、縄釉陶器について愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏に御教示いただいた。

記して感謝申し上げる。

- 5 本書の作成・執筆は、氏家信行が担当した。編集は須賀井新人・松田道雄が担当し、全体については佐藤正俊が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。
基準点測量は、(株)工藤測量設計に委託した。
遺構の写真測量・実測については、(株)シン技術コンサルに委託した。
資料の理化学分析(土壤分析)は、パリノサーヴェイ(株)に委託した。
- 7 出土遺物・調査記録類は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S T…豎穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S K…土坑	S D…溝跡
S X…性格不明遺構	S M…祭祀遺構	E K…遺構内土坑	
E B…建物跡柱穴	E P…遺構内柱穴	E U…埋設土器	
R P…登録土器	R W…登録木製品	P…土器	S…礫

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆基準は下記の通りである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、百目鬼遺跡がN-34°50' - Eを、樋渡遺跡がN-23° - Eを測る。
 - (3) 遺構実測図は1/10~1/200他の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、遺構実測図中の遺物実測図は1/12で採録し、●は遺物の出土地点を表す。
 - (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3で採録し、各々スケールを付した。なお、断面実測図の拓影図は右側に内面、左側に外面を表した。
 - (5) 遺物実測図について、土師器・赤焼土器・陶磁器は断面白抜き、須恵器は断面黒ベタとした。また、土器内面の網点は黒色処理を表す。
 - (6) 遺物観察表中の()の数値は図上復元の推定値、[]は残存値を示している。
 - (7) 遺物図版は、約1/3の縮尺で採録した。
 - (8) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。
 - (9) 基本層序および遺構覆土の色調の記載については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1 立地と自然環境	3
2 歴史的環境	3
III 百目鬼遺跡	
1 基本層序	5
2 遺構と遺物の分布	6
3 検出された遺構	6
4 出土した遺物	23
IV 横渡遺跡	
1 基本層序	27
2 遺構と遺物の分布	28
3 検出された遺構	28
4 出土した遺物	34
V 調査のまとめ	
1 百目鬼遺跡	40
2 横渡遺跡	40
報告書抄録	42
付編	卷末
「百目鬼遺跡の埋設土器の内容物について」	

表

百目鬼遺跡

表 1 土器観察表	26
-----------	----

横渡遺跡

表 2 土器観察表	39
-----------	----

表 3 陶磁器観察表	39
------------	----

挿 図

第1図 遺跡位置図 4

百目鬼遺跡

第2図 遺跡層序 5
第3図 調査区概要図 5
第4図 遺構配置図 7
第5図 S T 1住居跡・S K 7土坑 10
第6図 S T 134住居跡 11
第7図 S B 325掘立柱建物跡 12
第8図 S B 326掘立柱建物跡 13
第9図 S B 327掘立柱建物跡 14
第10図 S B 328掘立柱建物跡 15
第11図 S K 111・122・141・152土坑
　・ S X 89・164性格不明遺構 18
第12図 8-13・14G遺構群 19
第13図 S D 2・30溝跡 21
第14図 E U 104埋設土器
　・ S M 323祭祀遺構 22

第15図 S T 134・S B 325・S K 141
　・ 152出土遺物 24
第16図 S K 152・S D 2・3・S X 89
　・ 164出土遺物 25
第17図 E U 104・S P・包含層出土遺物 26

樋渡遺跡
第18図 遺跡層序 27
第19図 調査区概要図 27
第20図 遺構配置図 29
第21図 S B 95掘立柱建物跡 31
第22図 S K 69・71・73・74・78・88土坑
　・ S X 72・75性格不明遺構他 32
第23図 S D 1・45溝跡 33
第24図 S K 69・71・78・S D 1
　出土遺物 36
第25図 S D 1・45出土遺物 37
第26図 包含層出土遺物 38

図 版

百目鬼遺跡

図版1 遺跡遠景・委託業務・作業風景
図版2 S T 1住居跡
図版3 S T 134住居跡
図版4 S B 325・326掘立柱建物跡
図版5 S B 327・328掘立柱建物跡
図版6 S K 141・111・122・S X 89
図版7 S K 152・S X 164
図版8 S T 1・S D 2・3・S K 6・S X 10
図版9 S D 2溝跡
図版10 S D 30溝跡
図版11 E U 104埋設土器・S M 323祭祀遺構
図版12 調査区全景・調査説明会

図版13 出土遺物(1)

図版14 出土遺物(2)

樋渡遺跡

図版15 調査区近景・作業風景・調査風景
図版16 完掘全景・S B 95掘立柱建物跡
図版17 S K 69・71・74・S X 72・75
図版18 S K 78・88・69・71他
図版19 S D 1・45溝跡・S P 66柱穴
図版20 出土遺物(1)
図版21 出土遺物(2)
図版22 出土遺物(3)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

東北中央自動車道相馬・尾花沢線の建設事業計画は、平成2年度に県土木事業の上山～東根間都市計画道路整備事業として計画され、その後、国幹審より高速道路整備路線計画として、平成5年度に施行命令が発令され、平成8年度から本格的に事業が開始された。

この間、山形県教育委員会では山形県土木部等の関係諸機関と協議を図りながら平成2年度から遺跡詳細分布調査を実施している。

百目鬼遺跡・樋渡遺跡は、周知の遺跡であったが平成7年度に山形県教育委員会によりA調査(現地確認調査・表面踏査)が行われ、存在が再確認された。その後、遺跡の範囲・確認面までの深さを詳細に把握するためのB調査(試掘調査)が平成9年度に同教育委員会によって行われ、百目鬼遺跡は全体的に遺構・遺物は少ないが住居跡と考えられる落ち込みや土師器片が確認され平安時代の集落跡、樋渡遺跡も遺構・遺物は少ないが土坑・柱穴や土師器片が確認され縄文・平安時代の集落跡と推定された。

この調査結果に基づいて、山形県教育委員会と事業主体である日本道路公団が協議を行い、道路建設工事の着手前に両遺跡の第1次調査(予備調査)を実施し、その後に本発掘調査を計画的に進めることで調整が図られた。

第1次調査は、日本道路公団の委託を受けて財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成9年度から実施し、百目鬼遺跡・樋渡遺跡については平成10年4月10日～5月8日の期間で5日間行われた。

第1次調査の結果、路線内の遺跡範囲は百目鬼遺跡が東西約75m・南北約79m、面積4,600m²、樋渡遺跡が東西約25m・南北約45m、面積約810m²となり、両遺跡共に当初の県教育委員会の推定範囲よりわずかに縮小された。この結果をもとに協議を行い、高速道路建設に係る路線内について、平成10年度に財団法人埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受け第2次調査(発掘調査)を行うことで合意した。

発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

- ◆日本道路公団東北支社管理課長より山形県埋蔵文化財センター調査第一課長あてに「平成10年度埋蔵文化財発掘調査に係る費用積算調書の作成」の依頼(H10/1/19)。
- ◆山形県埋蔵文化財センター理事長より日本道路公団東北支社長あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積もりの回答(H10/2/10)。
- ◆日本道路公団東北支社支社長より山形県埋蔵文化財センター理事長あてに、「東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設に伴う平成10年度の埋蔵文化財発掘調査の依頼(H10/4/1)。
- ◆日本道路公団東北支社と山形県埋蔵文化財センターが、「埋蔵物発掘調査業務の委託契約を締結(H10/4/1)。

2 調査の経過

調査に先立って平成10年7月7日に日本道路公団東北支社山形工事事務所と山形県埋蔵文化財センターによる最終打ち合わせ及び調整を行った。その結果、発掘調査は最初に樋渡遺跡を、引き続き百目鬼遺跡を実施することにした。両遺跡の調査概要を以下に述べる。

〈樋渡遺跡〉

調査対象面積810m²について平成10年7月9日～7月31日までの実働15日間で実施した。

調査は、対象部分について重機を使用して表土除去した後、計画路線内のセンター杭STA 69+80mとSTA 70+60mを基準として調査区に5m×5mを1単位とする方眼グリッドを設定した。

その後、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する面整理作業をおこなった。次に、検出された遺構に登録番号を付け、土層観察のため覆土をベルト状に残したり、半截したのち完掘していった。

遺物は、一括出土品・残存状態の良いものについて登録番号を付し、他は遺構・グリッド毎に取り上げた。また、遺構の精査と並行して遺構の平面図・断面図の作成、写真撮影等の諸記録作業、遺物取り上げを行い7月31日に調査を終了した。

調査終了後の9月24日に関係者のみによる調査説明会を現地にて実施した。

〈百目鬼遺跡〉

調査対象面積4,600m²について平成10年7月27日～10月21日までの実働55日間で実施した。

調査は、対象部分について重機を使用して表土除去した後、計画路線内のセンター杭STA 50+95mとSTA 52+7.5mを基準とした線を延長するかたちで調査区に5m×5mを1単位とする方眼グリッドを設定した。

その後、人手による面整理作業を繰り返しながら、近年の搅乱による落ち込みに入り込んだ水田盤土の除去をスコップ等を使用して行った。

面整理作業は、遺構検出面の砂利層と降雨及び調査区内を縦断する暗渠処理等のため、8月3日～9月4日までの期間を要した。

検出された遺構には各々に登録番号を付け、土層観察のため覆土をベルト状に残したり、半截したのち完掘する遺構精査を行った。精査作業は、調査の工程上から雨が降ると水没してしまう調査区北東隅を優先的に実施し、その後、他の区画を随時行っていった。

また、遺構の精査に合わせて遺構平面図・断面図の作成、完形品・一括出土の遺物の登録、写真撮影等の諸記録作業、遺物取り上げを行った。

調査も終盤に近づいた10月15日には、調査の成果を広く公表する調査説明会を現地にて開催し、山形市立本沢小学校の生徒達をはじめ多数の参加者を得ることができた。

調査区全体の空中写真撮影は10月20日に実施し、10月21日に若干の記録作業を行った後、器材撤収を行い調査を全て終了した。

II 遺跡の立地と環境

1 立地と自然環境

山形市は、県中央部東寄り山形盆地の南部に位置し、市域は東が奥羽山脈西斜面の丘陵地帯から、西は出羽山地東斜面の丘陵帯に及ぶ。また、中央平野部を北流する須川は東部山岳帯から西流する馬見ヶ崎川・立谷川などの中小河川と西部出羽丘陵帯から東流する本沢川・富神川などの小河川を集め市の北西で最上川に注ぎ、立谷川と馬見ヶ崎川で扇状地がよく発達し市の中心部は馬見ヶ崎川扇状地の扇央湧泉帯に形成されている。

百目鬼遺跡は山形市南西部の山形市大字百目鬼に所在し、百目鬼地区南西側、須川左岸の自然堤防上の微高地に立地する。標高127mを測り、地目は水田・畠地・宅地である。

樋渡遺跡は、百目鬼遺跡の北方約1.5km、山形市大字富神台字樋渡に所在し、門伝地区の東側に位置する。遺跡北側を流れる富神川が形成する自然堤防の微高地と水田段差のある地形に立地し、標高119mを測り、地目は水田・畠地・果樹園である。

両遺跡が所在する県都山形市の南西部及び西部は、この地域の東側を縦断して流れる須川、西部出羽丘陵帯から東流し百目鬼遺跡の南方を流れる本沢川、樋渡遺跡の北側にある富神川で形成された扇状地上、もしくは後背湿地上に水田地帯や果樹園が広がる。また、遺跡の東側には西部工業団地が造成され、寿物工業を中心に着実な発展を遂げ、さらに百目鬼遺跡の西方には、近年宅地造成され多くの住宅が立ち並ぶ菅沢地区があり、道路網の整備・新設と共に日々変貌を遂げ、田園都市へと発展している。

2 歴史的環境

山形市南西部の百目鬼・樋渡遺跡の周辺は、須川と本沢川によって造成された肥沃な扇状地と丘陵地が広がり、古くは縄文時代から室町時代までの遺跡が点在する。

中谷柏地区の北側から東方にひらける前田遺跡は縄文時代後期の代表的な集落跡で、山形では最古の定住的な村落の跡と言われている。また、県内で初めて石包丁が出土して米作りの遺跡と確認された弥生時代の沢田遺跡が前田遺跡の南東に所在している。

そして、百目鬼遺跡の西方には、径30m前後を測る円墳で周辺から円筒埴輪片が出土し、内部主体が箱式石棺であった1号墳や、1号墳の南80mの稜線上にあり2段築成の径56mを測り、墳丘頂の周辺や下段上面に円筒埴輪列を巡らせ形象埴輪が出土している大円墳の、2号墳が所在する菅沢古墳群がある。構築年代は5世紀半を降らないものと推定されている。

さらに、標高220mの城山に築かれた長谷堂城跡は連郭式の山城で、百目鬼遺跡の南方の丘陵上に立地する。慶長5年の関ヶ原の戦いに伴う出羽合戦において、上杉氏の重臣直江兼続軍と最上軍の間で最大の激戦が展開され、当地は村山地方と置賜地方を結ぶ要衝の地であった。

以上の他にも、平成10・11年度に緊急発掘調査が行われ、古墳時代から中世を主とした人々の定住の跡が見つかった萩原遺跡や谷柏J遺跡が所在し、太古から途切れること無く人々の生活が営まれてきた地域であることがうかがえる。



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形南部」を使用)

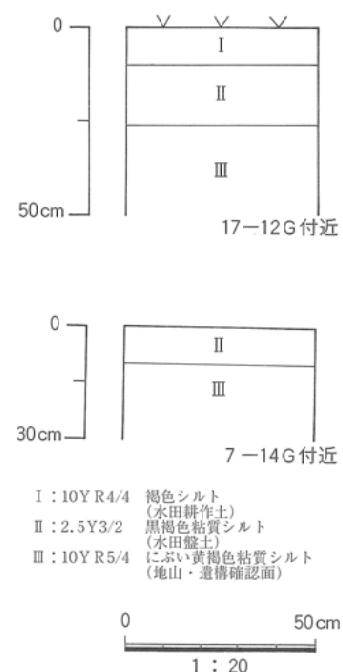
III 百目鬼遺跡

1 基本層序

遺跡は、須川左岸に広がる水田地帯の自然堤防状の微高地に立地する。調査区は近年の基盤整備事業により東側の果樹園よりも一段低い水田部分となる。しかも、平成10年度に客土のために調査区の大半の水田耕作土が除去されたことから遺構確認面までの深さが約10~25cmと浅くなっている。

残存する基本的な層序は3層で、耕作土が残る調査区南側の17-12G付近では、I層が褐色の砂混じりシルト(耕作土)で、II層が黒褐色シルトで砂利を少量混入している。第II層は水田の盤土と推測される。そして、III層が遺構確認面で地山層となる。地山層はにぶい黄橙色粘質シルトで砂利を多量に混入する。

また、耕作土を除去された7-14G付近では、水田盤土と推定されるII層が約10cm残存し、その下層がIII層の遺構確認面(地山)という状況であった。但し、南側に比べ、地山に混入する砂利は極めて少ない。なお、遺物の包含層は確認されなかった。



第2図 遺跡層序



第3図 調査区概要図(S=1:2,000)

2 遺構と遺物の分布

今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・土器埋設遺構・祭祀遺構・柱穴などである。分布状況は大半が調査区南側に集中する傾向が認められ、北側は性格不明の落ち込みや遺物を伴わない土坑など、明確な遺構は確認されなかった。

また、南側でも、東側と西側において遺存状態の良い遺構の密集度について違いが見られた。東側には、竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡2棟及び土坑などが検出されたが、他は少量の遺物が出土するものの攪乱と推測される溝状の遺構が多数を占め、近年に攪乱や削平を多く受けている部分と考えられる。そして、西側は竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡2棟・溝跡2条の他に祭祀遺構・土器埋設遺構や土器を伴う土坑などが検出され密度が高く遺存状態の良い遺構が集中している。

第2次調査の出土遺物は、整理箱に21箱である。その分布は、ほとんどが調査区南側に位置する遺構及び近年の攪乱から出土した。奈良・平安時代の土器は竪穴住居跡・溝跡・土坑そして土器埋設遺構から出土しているが、全体的に稀薄であり、完形に近いものは埋設土器と土坑から出土した壊のみである。他は土器の破片が大半を占め、南東側に位置する攪乱状の溝跡からも出土した。

また、近世の遺物と推定される桶や箍などの木製品、金属製品の蹄鉄、そして馬の骨は南端の祭祀遺構から出土した。調査区内は遺物の遺存状態も悪く、稀薄であり近年の攪乱・削平の影響を受けていると考えられる。遺跡は、調査区の東側と西側に延びると推定されることから今回の調査区外に良好な遺構・遺物が存在することを期待したい。

3 検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡2棟・掘立柱建物跡4棟・溝跡2条・埋設土器1基・祭祀遺構1基・土坑・性格不明遺構・柱穴などである。時期は、概ね平安時代と近世に大別される。調査区が攪乱・削平を受けていたため遺存状態は良くない。以下に主な遺構の概要を述べる。

(1) 竪穴住居跡

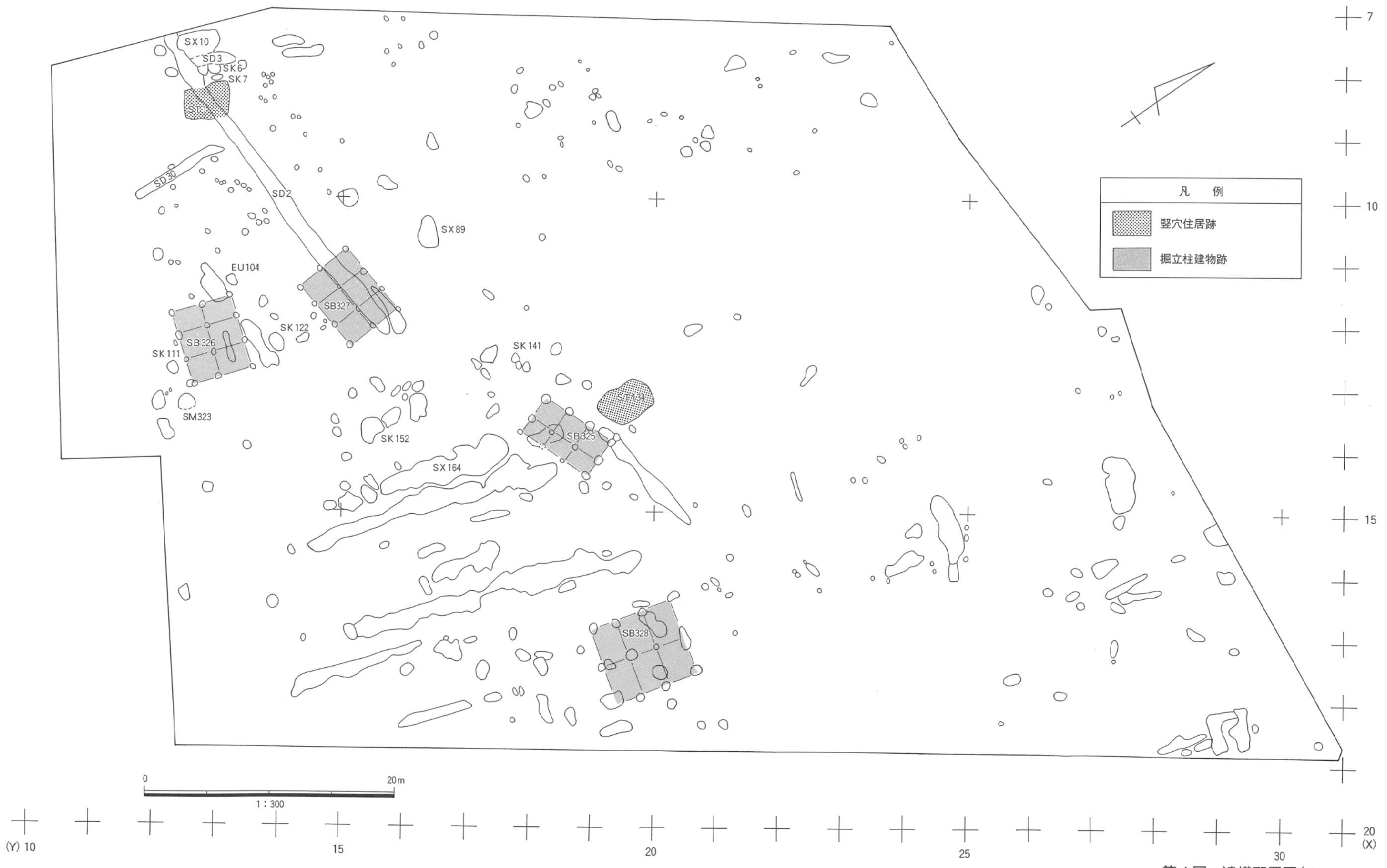
S T 1住居跡(第5図 図版2)

調査区南西側、9-13・14Gで検出され、SD 2溝跡に切られる。規模及び平面形は、長辺(南北)が3.6m、短辺(東西)が約2.3~2.8mの不整方形を呈する。床面までの深さは確認面から約10~20cm、長辺の主軸はN-28°-Eを測る。

床面は堅くしまるが起伏があり、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。床面からは、長径1.8m、短径0.9mで深さ30cmを測る貯蔵穴(E K 4)が住居の北西壁に1基と、直径約25cm、深さ約10cmを測り、平面形が円形となる3基の柱穴(E P 1~3)が検出された。

遺物は、赤焼土器や須恵器の破片が覆土から6点出土している。

住居跡の所属時期は、出土した土器に底部切離が回転糸切りと確認できる赤焼土器片があることから、概ね平安時代と考えられる。



第4図 遺構配置図(S=1:300)

S T134住居跡(第6図 図版3)

調査区中央付近、13・14-19・20Gで検出されS B325の北側に隣接する。規模及び平面形は、長辺(南北)が3.9m、短辺(東西)が約2.7~3.0mの不整形を呈する。床面までの深さは確認面から約15~20cm、長辺の主軸はN-12°50'-Wを測る。

床面は堅くしまり平坦で、壁の立ち上がりは急である。床面からは、長径1.0m、短径0.8mで深さ25cmを測る貯蔵穴(E K 1)が住居の北側壁に1基と6基の柱穴(E P 2~7)が検出された。但し、E K 1とE P 2は近年の暗渠跡によって一部分が破壊されている。

遺物は、覆土及び床面、柱穴から赤焼土器の壺2点(15-1・2)の他、破片数十点と須恵器片2点が出土した。住居跡の所属時期は、床面から出土した土器に底部切離が糸切りと確認できる赤焼土器片があることから、概ね平安時代と考えられる。

(2) 挖立柱建物跡

S B325建物跡(第7図 図版4)

調査区中央部付近、14・15-18~20Gで検出された。規模は東西3間×南北2間で中央にも柱を持つ総柱の建物跡と推測されるが、E B 2・11に対応する柱穴は検出されなかった。長軸は磁北から東に88度傾く。柱間の距離は東西が約2.1m、南北が約1.9m(北側)・約1.5m(南側)を測る。各柱穴の規模は長径50~80cm、短径40~60cmの楕円形を呈するが、E P 7・8・11は経20cm程と他の柱穴と比較して小さく、深さは概ね10~30cmを測る。遺物はE B 1から赤焼土器甕片(15-3)とE B 6から赤焼土器破片が出土し、所属時期は平安時代と推測される。

S B326建物跡(第8図 図版4)

調査区南西端、12・13-13・14Gで検出された。規模は東西3間×南北2間で中央にも柱をもつ総柱の建物跡と考えられるが、E B 2・9に対応する柱穴は検出されなかった。長軸は磁北から西に71度傾く。柱間距離は東西が約2.0m、南北が約2.2mを測り、各柱穴の規模は長径40~80cm、短径30~50cmの楕円形を呈し、深さ10~20cmを測る。

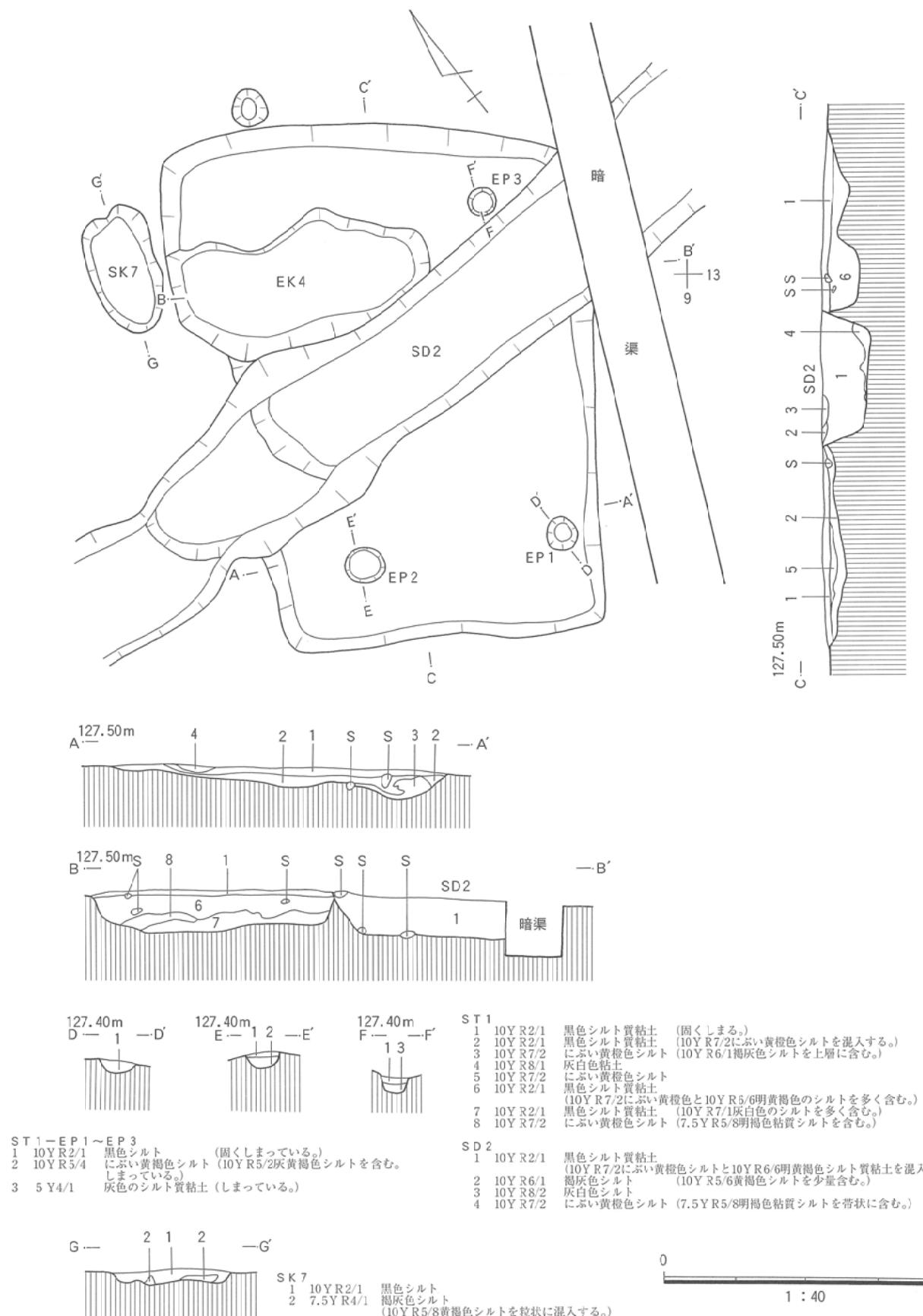
遺物はE B 9から赤焼土器破片が出土し、所属時期は平安時代と推測される。

S B327建物跡(第9図 図版5)

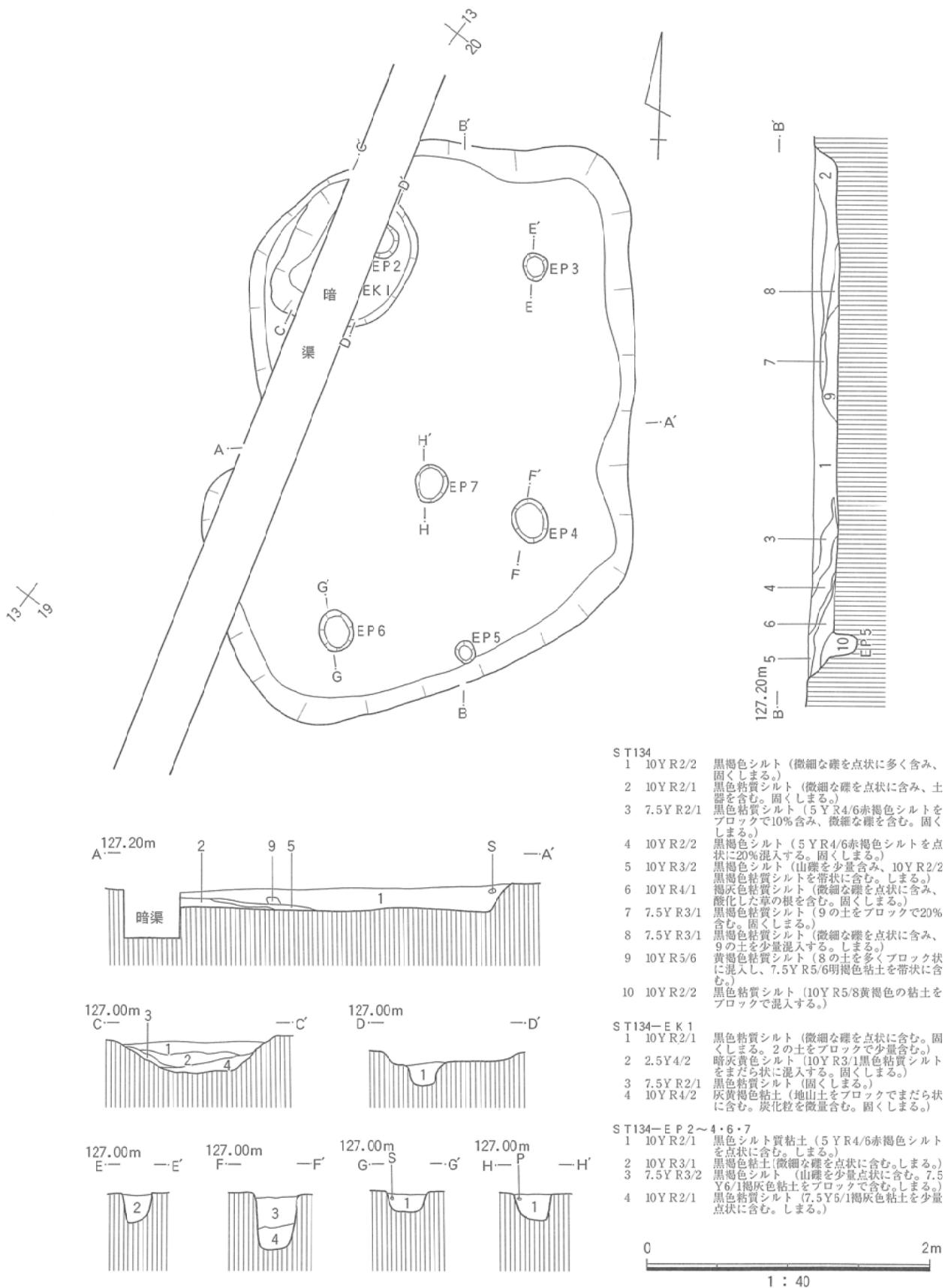
調査区南西側、11-13-15-17Gで検出されS D 2と重複する。規模は東西3間×南北2間で中央にも柱を持つ総柱の建物跡と推測されるが、E B 1・5に対応する柱穴は検出されなかった。長軸は磁北から85度50分東に傾く。柱間の距離は東西が約2m、南北が約2.3mを測り、各柱穴の規模は長径30~50cm、短径30~40cmの円形や楕円形を呈し、深さ10~20cmを測る。遺物の出土は無いが、所属時期は規模等から平安時代と考えられる。

S B328建物跡(第10図 図版5)

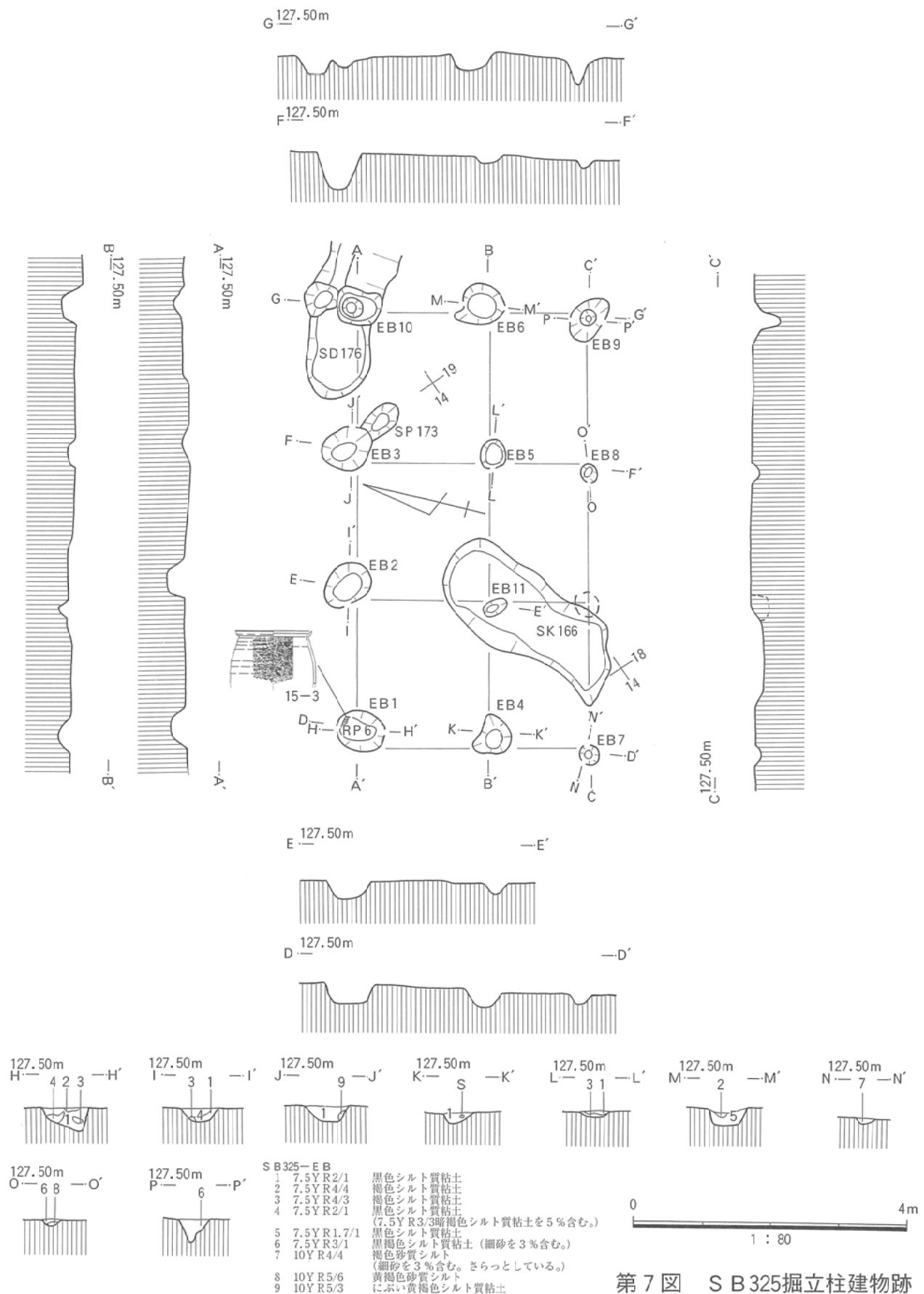
調査区東側17・18-20・21Gで検出された。規模は南北3間×東西2間の中央に柱を持つ総柱の建物跡である。長軸は磁北から15度50分東に傾く。柱間の距離は南北が約2.4m、東西が約3.0mを測り、各柱穴の規模は概ね長径30~90cm、短径30~90cmを測る楕円形を呈し、深さ10~80cmを測る。遺物は、E B 1・2・8・12から赤焼土器の破片が出土し、底部切離が回転糸切りと確認できるものが数点認められることから所属時期は平安時代と推測される。



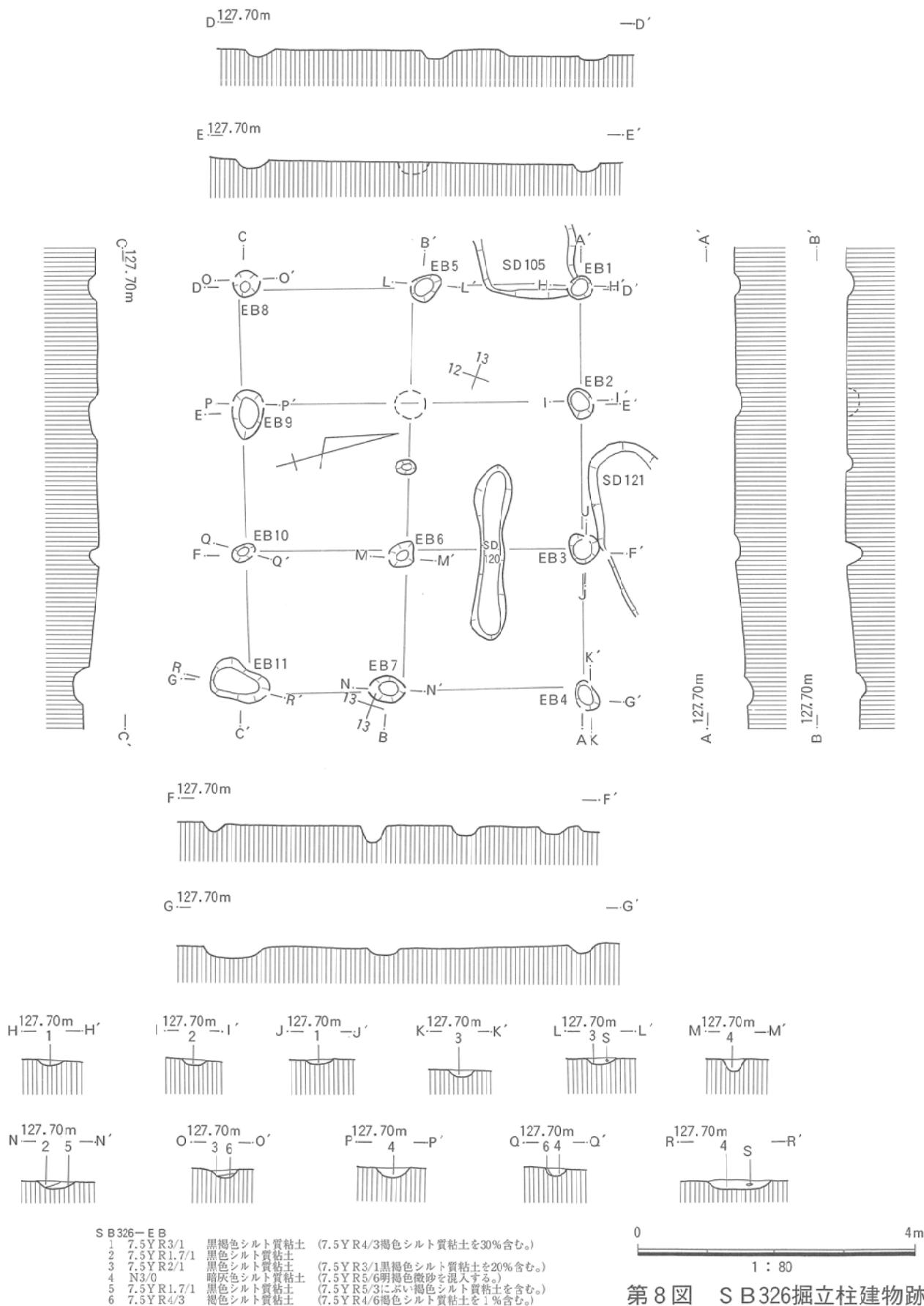
第5図 ST 1住居跡・SK 7土坑



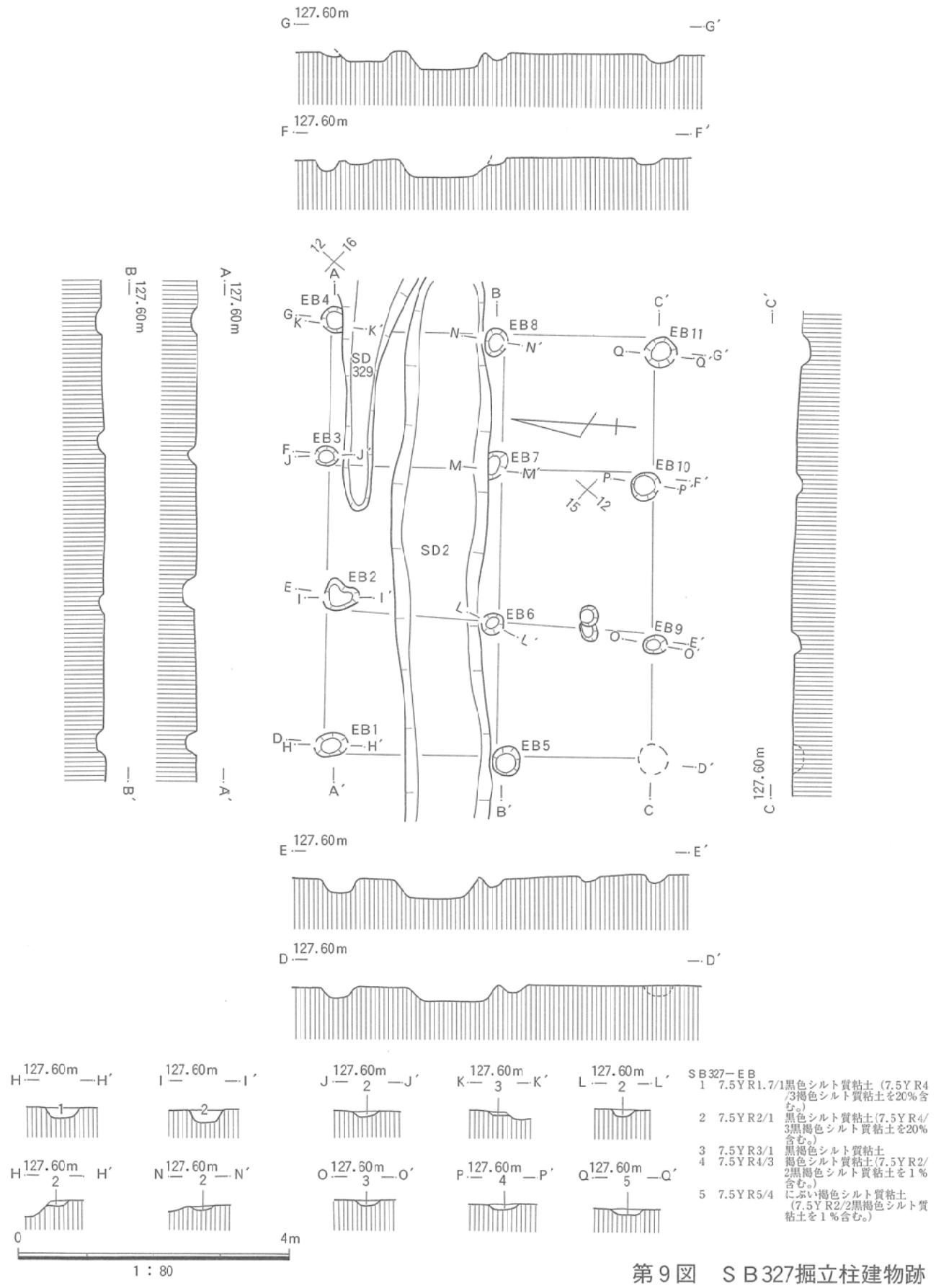
第6図 S T134住居跡



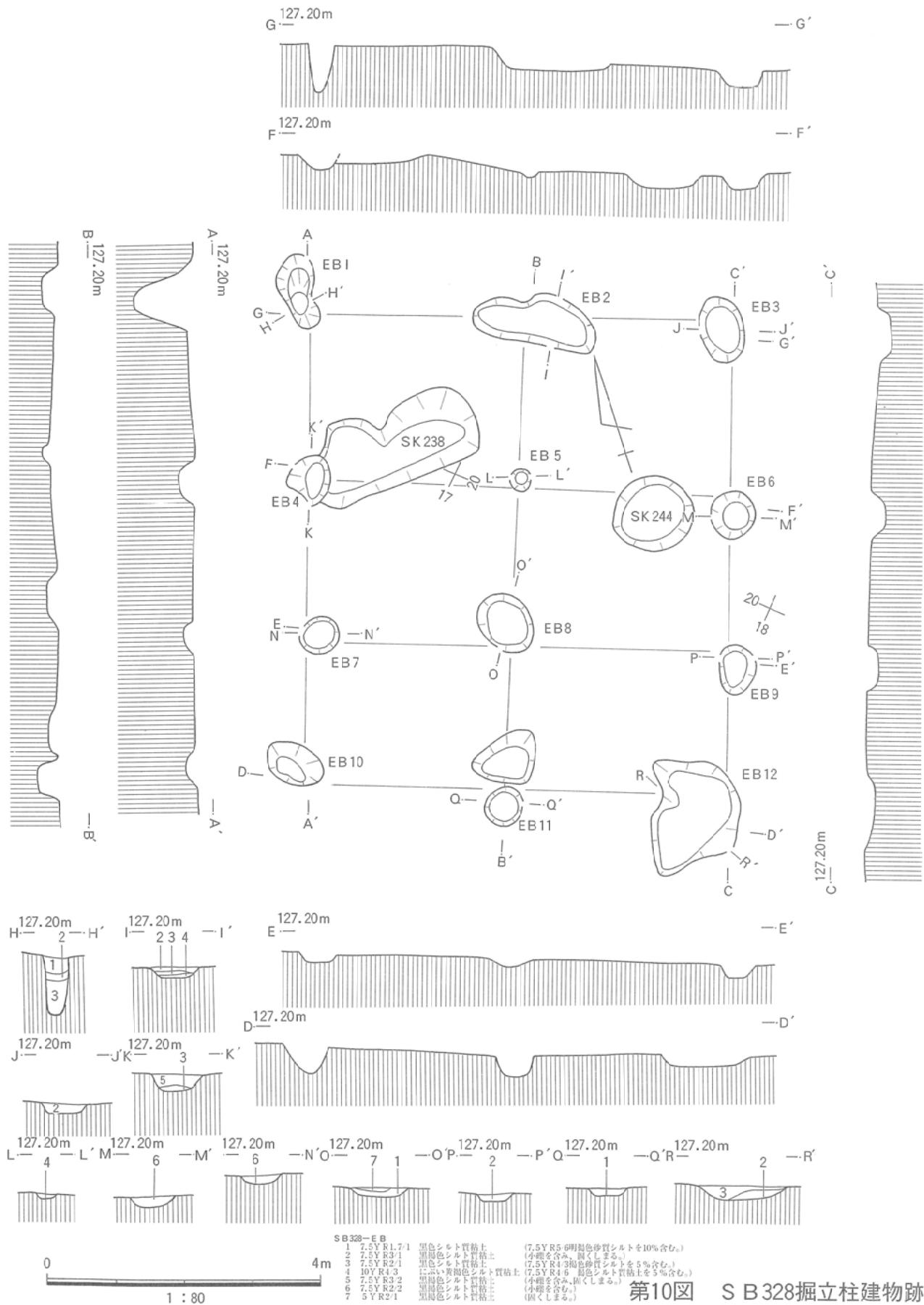
第7図 S B 325掘立柱建物跡



第8図 S B 326掘立柱建物跡



第9図 SB 327掘立柱建物跡



(3) 土坑・性格不明遺構(第5・11図 図版6・7)

S K 7 土坑

調査区南西側9-13Gで検出され、S T 1の西側に隣接する。平面プランは長径85cm・短径45cmの橿円形を呈し確認面からの深さ10cmを測る小規模土坑である。断面形は壁面が斜めに掘り込まれ底面は若干の凹凸は見られるが、ほぼ平坦となる台形状を示す。

覆土は2層に分かれ、黒色シルトが主に堆積、褐灰色シルトは底面にブロック状に堆積する。

S K 141 土坑

調査区中央付近13-18Gで検出された。平面プランは長径75cm・短径60cmの橿円形を呈し確認面からの深さは20cmを測る小規模な土坑である。断面形は壁面が斜めに掘り込まれ底面はほぼ平坦となる台形状を示す。

覆土は3層に大別され、1・2層は黒色シルト質粘土で、第3層のにぶい黄褐色シルト質粘土は底面に薄く堆積する。

時期は、赤焼土器の壺(15-4・5)が覆土中から出土していることより平安時代と推測される。

S K 111 土坑

調査区南端13-13Gで検出され、S B326の南側に位置する。平面プランは経90cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ15~20cmを測る。断面形は壁面が斜めに掘り込まれ底面がほぼ平坦となる台形状を示す。

覆土は1層で黒色シルト質の粘土となり小礫を含む。

S K 122 土坑

調査区南側13-15Gで検出され、S B327の南側に位置する。平面プランは長径135cm、短径110cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さ20cmを測る。断面形は壁面が斜めに掘り込まれ底面が平坦となる台形状を示す。

覆土は3層に分かれ黒色の粘質シルト、にぶい黄褐色粘土、黒褐色粘土の各層が混在する様相が認められ、人為的に埋められた可能性が推測される。

遺物は覆土中から赤焼土器の破片が10点程出土しているが、土器が小破片であるため所属時期についてはなお検討を要する。

S K 152 土坑

調査区中央やや南側14-16Gで検出された。平面プランは長径210cm、短径200cmで東側に張り出し部分を持つ不整形を呈し、確認面からの深さは張り出し部が約15cm、最深部で40cmを測り、東側が二段になる断面形を示す。壁面はほぼ直角に立ち上がり、底面は堅く締まり平坦である。

覆土は3層に分かれ、1層目の褐色土が厚さ4cmで上層に堆積し、2層目の明黄褐色土が3層目の黒色土に内包されるという特異な堆積を示していた。

遺物は覆土中及び底面から赤焼土器の壺(15-6~16-12)、内黒土器の高台付壺(16-13~15)、須恵器の甕(16-18)及び壺(16-16・17)の他に土師器の甕(16-19)や破片などが出土した。これらの出土遺物から所属時期は平安時代と推定される。

S X 89性格不明遺構

調査区中央やや西側11-17Gで検出され、S B327の北側に位置する。西端部分を近年の暗渠によって破壊を受けている。平面プランは長径240cm以上、短径160cmの橢円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは最深部で90cmを測る。断面形は南壁が急角度に、北壁が緩やかに掘り込まれ底面が平坦となるほぼ台形状を示す。

覆土は3層に分かれ黒褐色シルト質の粘土と黒色シルト質粘土がレンズ状に堆積する。

遺物は、赤焼土器の坏(16-23)、や土師器の甕破片が覆土中から出土していることから、所属時期については平安時代と考えられる。

S X 164性格不明遺構

調査区南側14・15-16~18Gで検出され、S B325の南側に位置する溝状の遺構である。平面プランは長さ10.8m、幅1.0~2.6mの不整形を示す。確認面からの深さは約30~70cmを測り、断面形は中央が深くなり壁面が緩やかに立ち上がるレンズ状の様相を示すが、底面は一定せず部分的に凹凸が存在する。

覆土は5層に分かれるが、概ね第1~3層の黒褐色及び黒色のシルト質粘土と暗褐色の砂質シルトが主体を成す。但し、第3層は帯状またはブロック状に堆積する。

遺物は、覆土中から赤焼土器の坏(16-24・25)や破片が出土しているが、この遺構の周辺は搅乱の様相を示す溝状や不整形の掘り込みが多数存在することから、所属時期や性格についてはなお検討を要する。

(4) 8-13・14G遺構群(第12図 図版8)

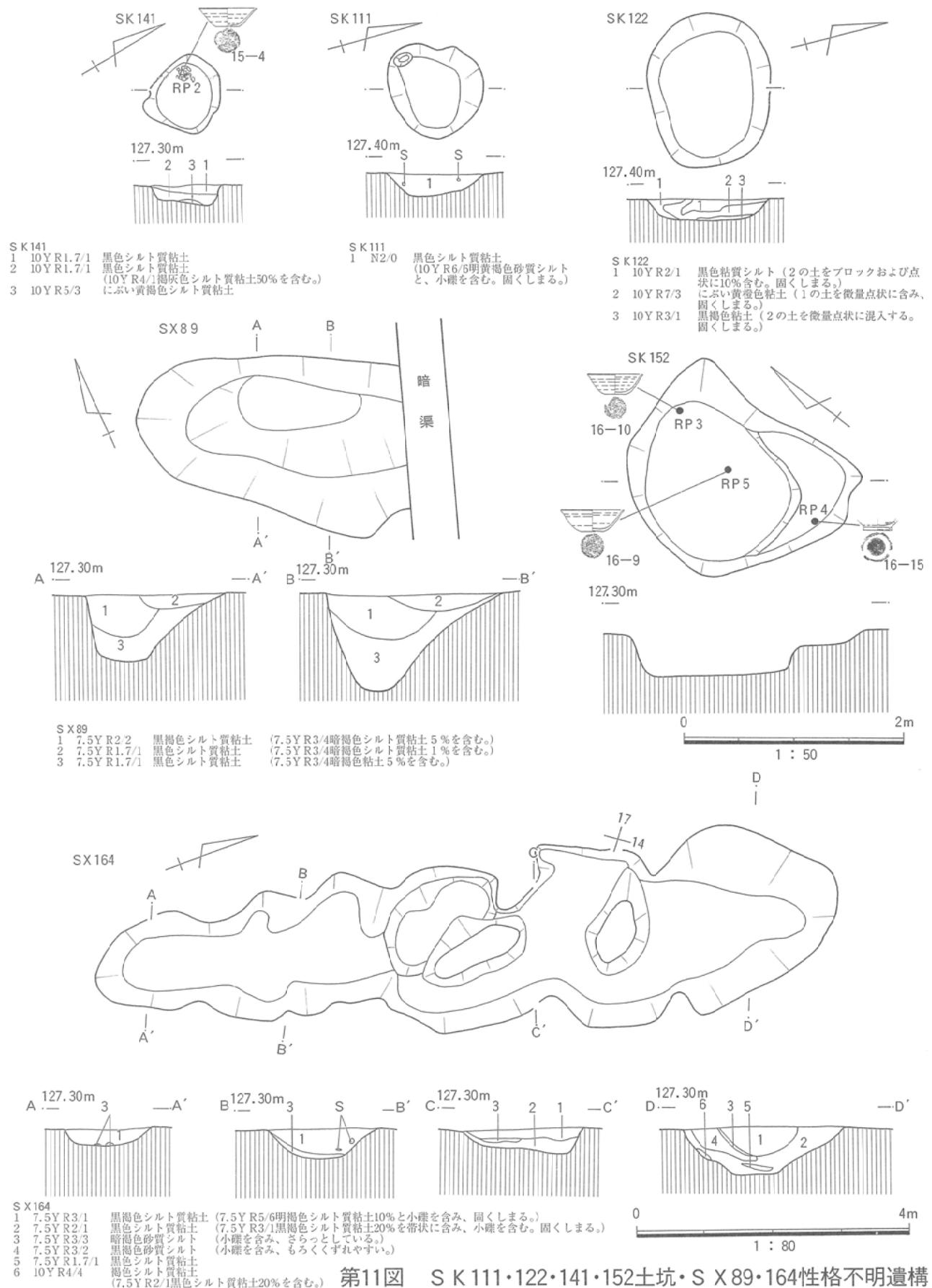
調査区の南西端のS T 1西側で検出されたSD 3・SK 6・SX 10について概要を述べる。各遺構は重複しており、土層断面からSD 3はSK 6とSX 10より新しく、SK 6とSX 10の関係は不明そして、SX 10はSD 2より新しいと推定された。

SD 3は平面プランが長さ3.4m、幅0.9mの細長い溝状となり、確認面からの深さ15~25cmを測り、断面形は底面が平坦で壁面が急角度で立ち上がる台形状を示す。覆土は4層に分かれるが、概ね黒色と褐灰色のシルト質粘土となる。

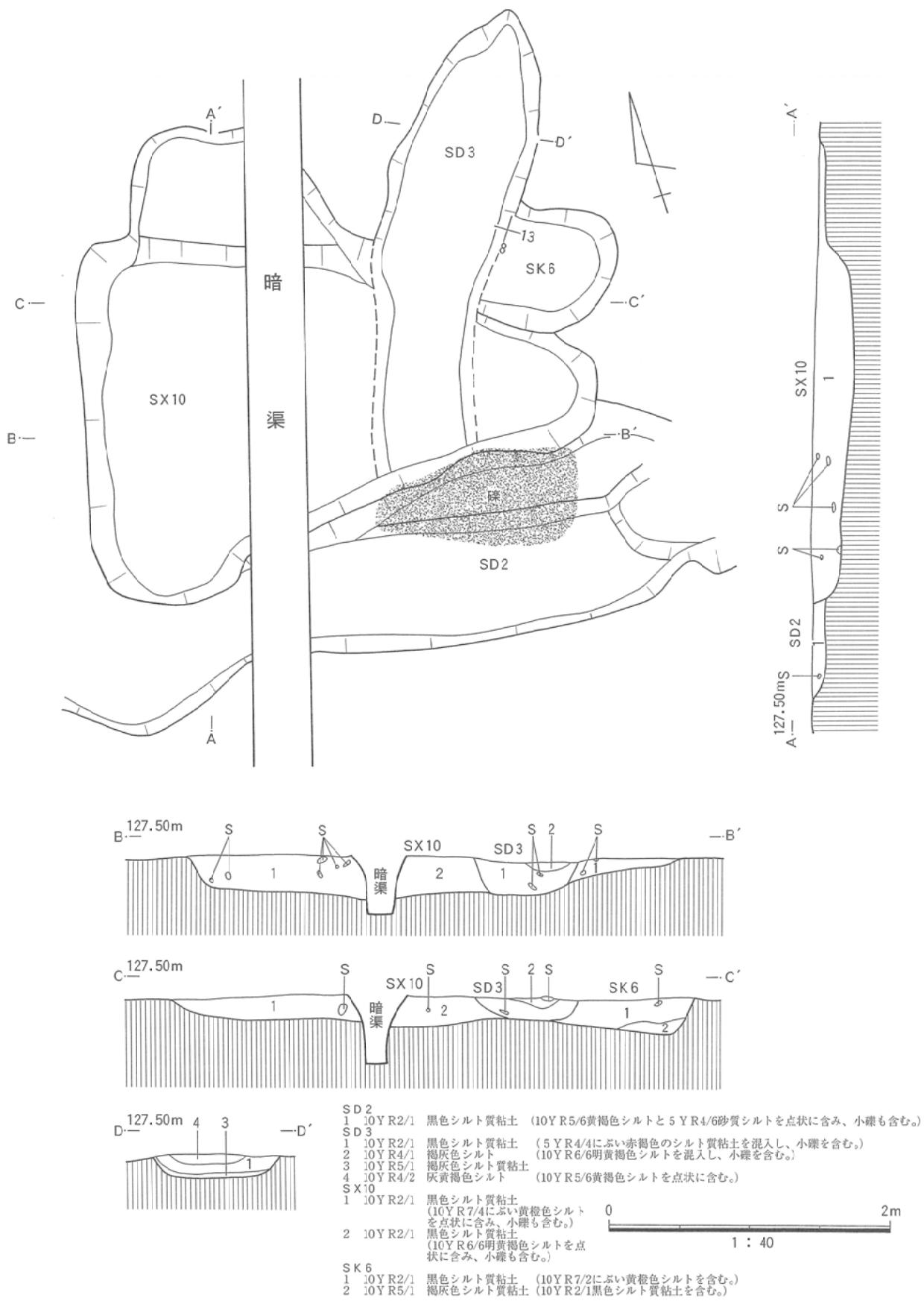
SK 6は西半をSD 3に切られる。平面プランは長径80cm以上、短径80cmの橢円形を示すと考えられ、確認面からの深さ20~25cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面は斜めに立ち上がる。覆土は2層で黒色シルト質粘土が主に堆積し、褐灰色シルト質粘土が底面に堆積する。

SX 10は中央を近年の暗渠に破壊され、東側をSD 3に切られ、南側でSD 2を切る竪穴状の遺構である。また、北側に掘り込みが浅い張り出し部分を持つ。確認面からの深さは張り出し部で5cm、最深部で30cmを測る。底面はほぼ平坦となり壁面は急角度で立ち上がる。平面プランは長辺3.6m、短辺3.4mの不整形となる。覆土は2層に分かれるが、混入する土に相違があるので大差はない。

上記の遺構からの出土遺物は、SD 3の覆土から底部切り離が回転範切りとなる須恵器の坏底部(16-22)が1点出土した。これらの遺構群所属時期は、土層断面からSD 2よりも新しいと推測されるが、SD 3出土土器が古い様相を示すことからさらに検討を要する。



第11図 SK 111・122・141・152土坑・SX 89・164性格不明構造



第12図 8-13・14G 遺構群

(5) 溝跡 (第13図 図版9・10)

S D 2 溝跡

調査区南西側8~12-13~16Gで検出された幅1.0m、長さ30mでさらに西側に延びると推測され、南北軸にほぼ直交する溝跡である。東側でS B327の柱穴を西側でS T 1を切り、S X 10に切られる。確認面からの深さは20~30cmで東側から西側にかけて傾斜する傾向を示すが、S T 1西側で段を形成し、断面形は底面が平坦で壁面が緩やかに立ち上がる台形状となる。

遺物は、覆土中から須恵器の甕(16-20)、壺(16-21)の他に須恵器や赤焼土器の破片が十数点出土している。これらの土器から平安時代頃に機能していた溝跡と考えられる。

S D 30 溝跡

調査区南西端10・11-12~14Gで検出され、S D 2の南側に位置する。幅0.8m、長さ8.0mで南北軸に沿う溝跡である。確認面からの深さは25~30cmを測り、中央部が深く弧を描き壁面が垂直に立ち上がるU字形の断面形を示す。

出土遺物が無いため機能していた時期等の詳細は不明。

(6) 埋設土器・祭祀遺構(第14図 図版11)

E U104埋設土器

調査区南西側12-14Gで検出され、S B326の西側に位置する。掘り方の平面プランは長径35cm、短径32cmの円形に近く、土器は西側に寄せて埋設している。断面は北側で確認し、土層断面から大きめに掘り込み次に土器にあわせて若干埋め戻した後に土器を設置したことがうかがえる。覆土は2層で黒色シルトと黒褐色砂質シルトで地山の土を混入している。

土器は土師器の甕が正位の状態で設置しており底部は抜いてあった。口縁部は土器の内部に約1/3程残存していた。しかし、体部の上部分が重機で削られたために接点は無い。

埋設土器内の土壤分析について詳細は付編に述べられており、分析結果から周辺の土にたいして土器内の土にリン酸・カルシウムの含量が多いことから、骨を埋葬した可能性が強い。また、位置関係からS B326に關係する鎮祭のための埋設遺構とも考えられるが、詳細はさらなる検討を要する。

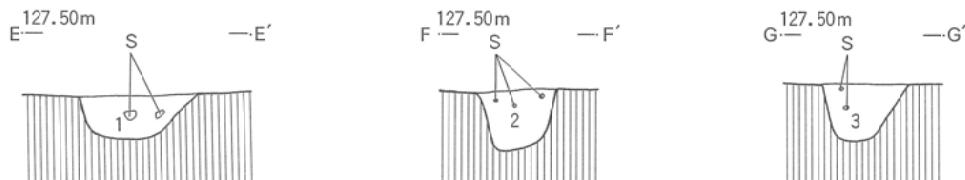
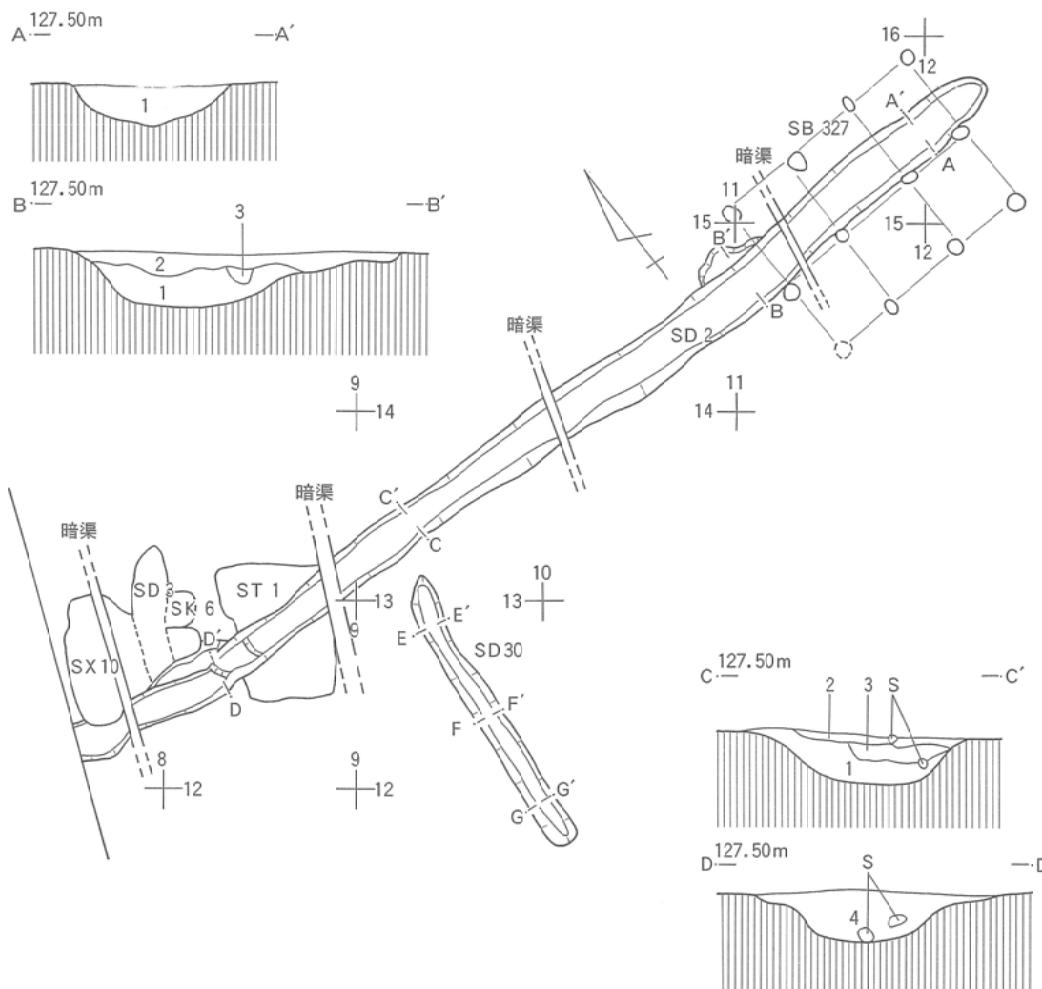
S M323祭祀遺構

調査区南側端14-13Gで検出され、S B326の東側に位置する。東側部分を近年の暗渠に破壊されている。平面プランは径130cm程の円形に近い形になると想えられ、確認面からの深さは30cmを測る。

覆土は4層に分けられ1層目の暗灰色シルト質の粘土は上部からの圧力で入り込んだ土、第2・3層は褐灰色粘土で地山の土に類似し、出土した桶板が内側に傾斜していたことから壁面が崩落した土と推定される。また、第4層は桶内部の土で、他の土とは明らかに違う黒褐色の粘質シルトで締まりがなく柔らかい土である。

遺物は、木製で円形の桶と竹製の籠、骨そして蹄鉄が出土している。蹄鉄から骨は馬の骨と考えられ、馬の骨と蹄鉄を木製の桶に入れて埋葬し祀ったものと推測される。

蹄鉄の使用は明治時代頃からであり、遺構の時期は明治時代以降と推定される。

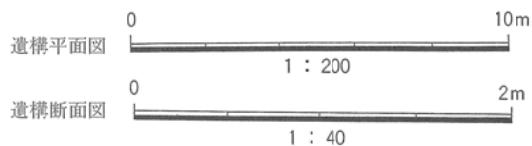


SD 2

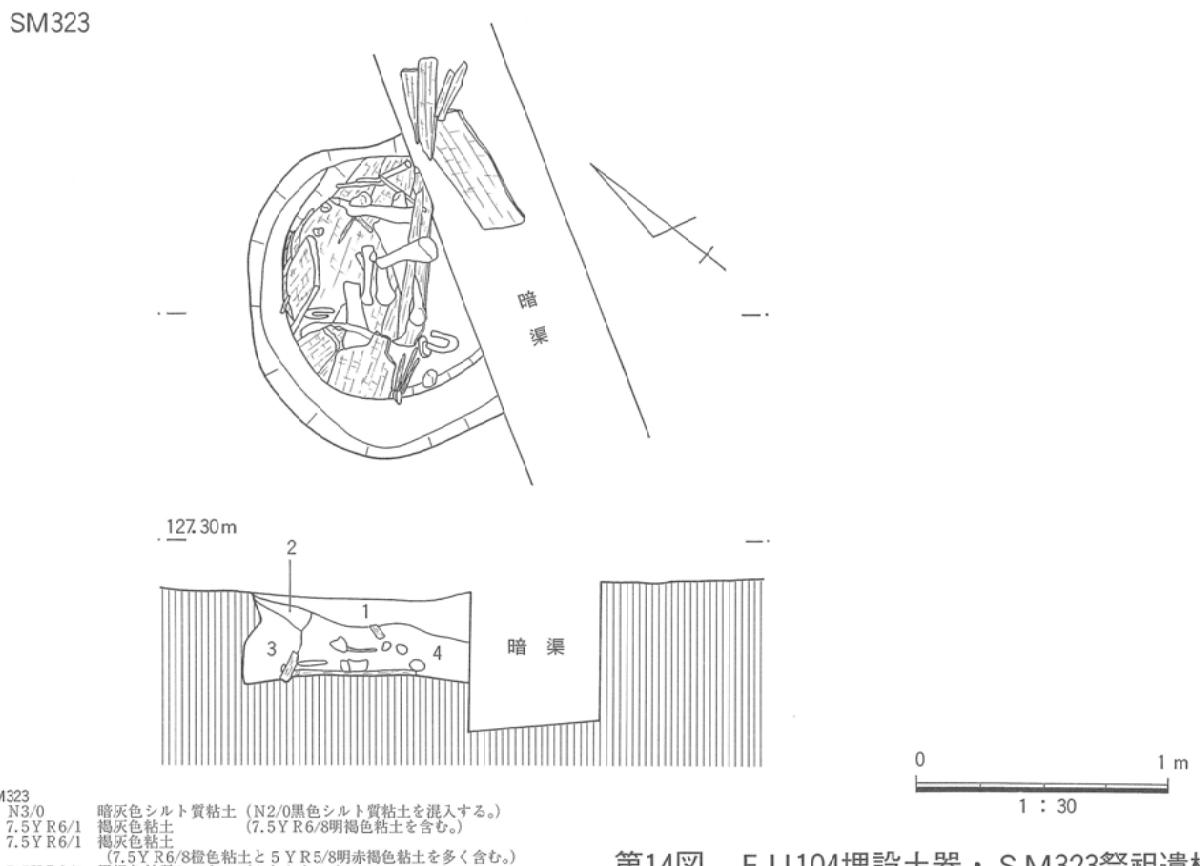
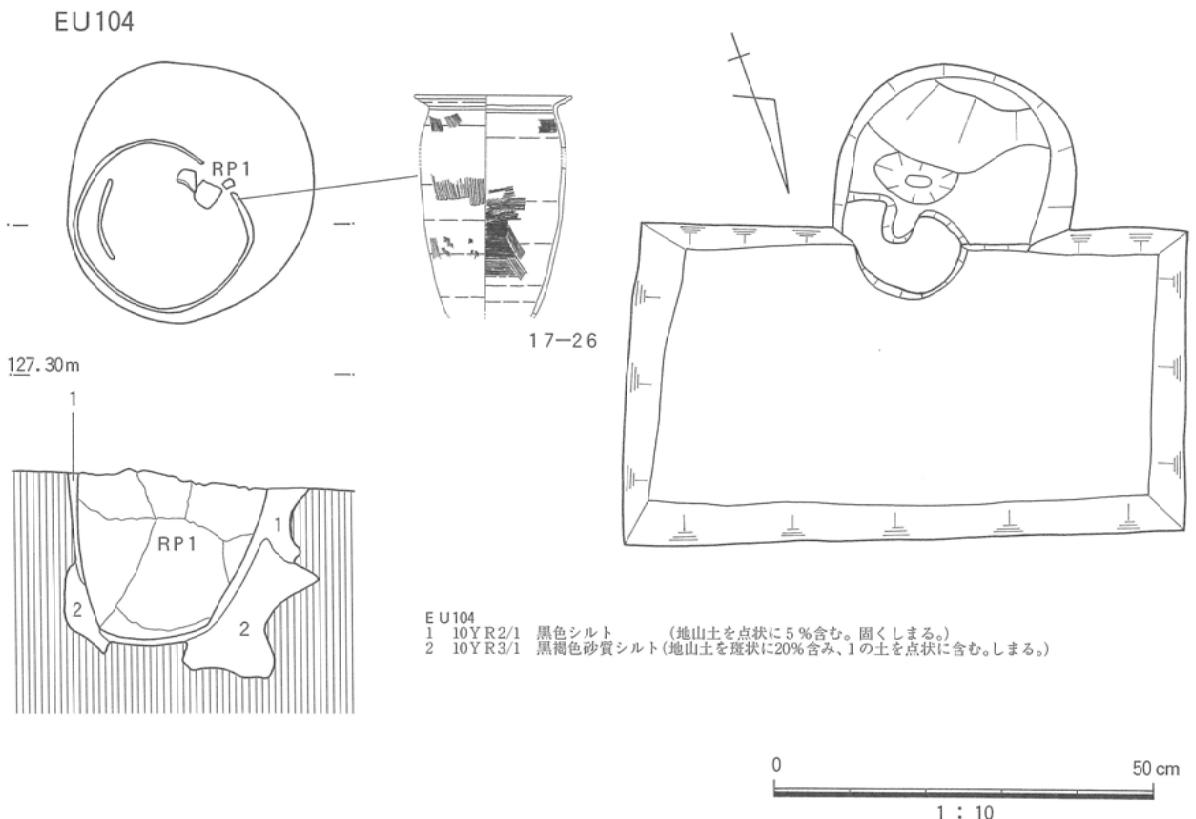
1 N3/0	暗灰色シルト質粘土 (N2/C暗灰色シルト質粘土を含み、固くしまる。)
2 7.5Y R3/4	暗褐色砂 (多量の小礫を混入する。)
3 7.5Y R3/4	暗褐色砂 (N3/C暗灰色のシルトを含む。)
4 10Y R2/1	黒色シルト質粘土 (10Y R5/6黄褐色シルトと5Y R4/6砂質シルトを点状に含む。)

SD 30

1 N3/0	暗灰色シルト質粘土 (10Y R6/2灰黃褐色シルト質粘土を点状に混入し、礫を多く含む。)
2 N3/0	暗灰色シルト質粘土 (10Y R6/1褐灰色シルト質粘土を混入し、礫を含む。)
3 N3/0	暗灰色シルト質粘土 (10Y R6/4にぶい黄褐色シルト質粘土を混入し、礫を含む。)



第13図 SD 2・30溝跡



第14図 EU104埋設土器・SM323祭祀遺構

4 出土した遺物

今回の調査では石器・土器・木製品・金属製品・骨など縄文時代・平安時代・近世の遺物が整理箱に21箱出土した。但し、大半を祭祀遺構(SM323)から出土した桶材と骨などが占め、土器は約10箱で遺存状態が悪く小破片が多く、掲載できたものは30点程であり完形・略完形品は極めて少ない。また、石器が1点出土しているが、縄文時代の遺構及び土器等の検出・出土が無いことから混入と考えられる。

以下に各遺物の概略を遺構毎もしくは機種毎に述べる。

S T 134の土器(第15図 図版13)

図示できたものは2点のみで、赤焼土器の壺である。1は底径が小さく体部が直線的に立ち上がり、2は器高が高くなると推定され底径も大きい。2点とも摩滅が激しく底部切り離しは不明である。また、2は住居内の柱穴からの出土で二次加熱を受けている。

S B 325の土器(第15図 図版13)

3は建物跡を構成するE P 1から出土した赤焼土器の甕で、口クロ整形で体部が丸味を帯び、口縁部がやや外反する。

S K 141の土器(第15図 図版13)

赤焼土器の壺2点が出土した。4は略完形品で、器形が1と類似し底径が小さく体部が直線的に立ち上がる。5は底部資料で、底径は4とほぼ同じ大きさとなる。2点とも摩滅が激しく底部切り離しは不明である。

S K 152の土器(第15・16図 図版13・14)

赤焼土器の壺で図示できたものは7点で、6～10は底部切り離しが回転糸切りとなる。また、9～11は体部がやや丸味をもち口縁部が外反する器形となる。二次加熱を受けている12は器形が1・4と類似し体部が直線的に立ち上がる。

13～15は内黒土器の高台付壺の底部資料である。内面に黒色処理を施しているが摩滅が激しくミガキなどの調整は不明である。底部の切り離しが確認できたのは13のみで回転糸切りとなる。また、14は二次加熱を受けている。

16・17は須恵器の壺の口縁部と底部の資料で、18は須恵器の甕の体部資料である。16は短頸壺で口縁部が外反する。17は底部に範削り調整を施し、焼成が不十分であったため内外面とも、にぶい橙色を呈する。18は外面に平行タタキ目、内面にアテ痕が認められる。

19は土師器の甕の口縁部から肩部にかけての資料で、外面にナデ調整、内面に刷毛目調整が施される。

S D 2 の土器(第16図 図版14)

20は須恵器の甕の体部片で、外面にタタキ目、内面に同心円アテ痕が認められる。21は底部を欠く須恵器の壺の体部下の資料で外面にタタキ目、内面にアテ痕が認められる。

S D 3 の土器(第16図 図版14)

22は須恵器の壺の底部資料で、底部切り離しが回転範切りとなり、底径が大きいことから、他の土器よりも古い様相を示す。

S X 89の土器(第16図 図版14)

23は赤焼土器の壺の底部資料で、体部が直線的に立ち上がる器形を示す。底部切り離しは摩滅が激しく不明である。

S X 164の土器(第16図 図版14)

赤焼土器の壺の口縁部と底部資料である。24は燈明皿に転用され、内外面に煤が付着している。器形は体部が直線的に立ち上がる。25は底部切り離しが回転糸切りとなる。

E U 104埋設土器(第17図 図版14)

埋設土器は26の土師器の甕が1個体で、口縁部が約1/3体部内に残存していたが接点が無く底部を欠く。体部が細長く口縁部が強く外反し、内外面に刷毛目が頸部にナデ調整が認められるが器面の荒れが著しい。

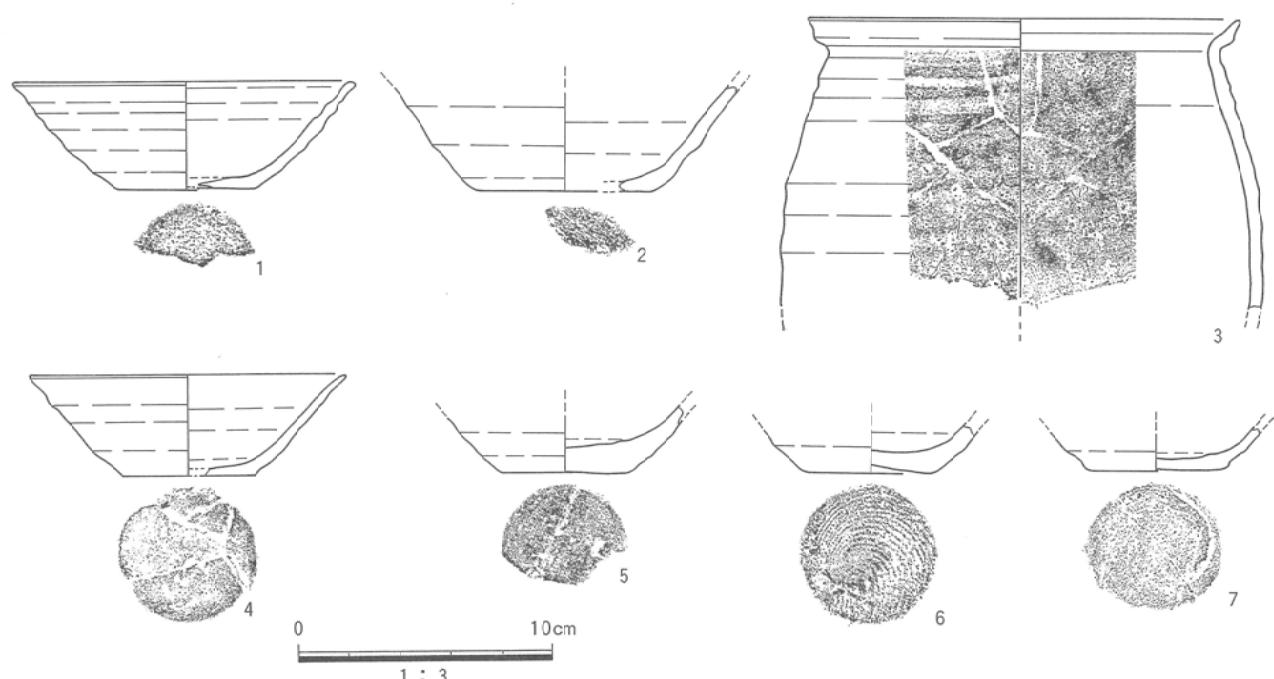
S Pと遺構外出土の土器、石器(第17図 図版14)

27はS P 298から出土した赤焼土器の壺の底部資料であるが摩滅が激しく底部の切り離しは不明である。

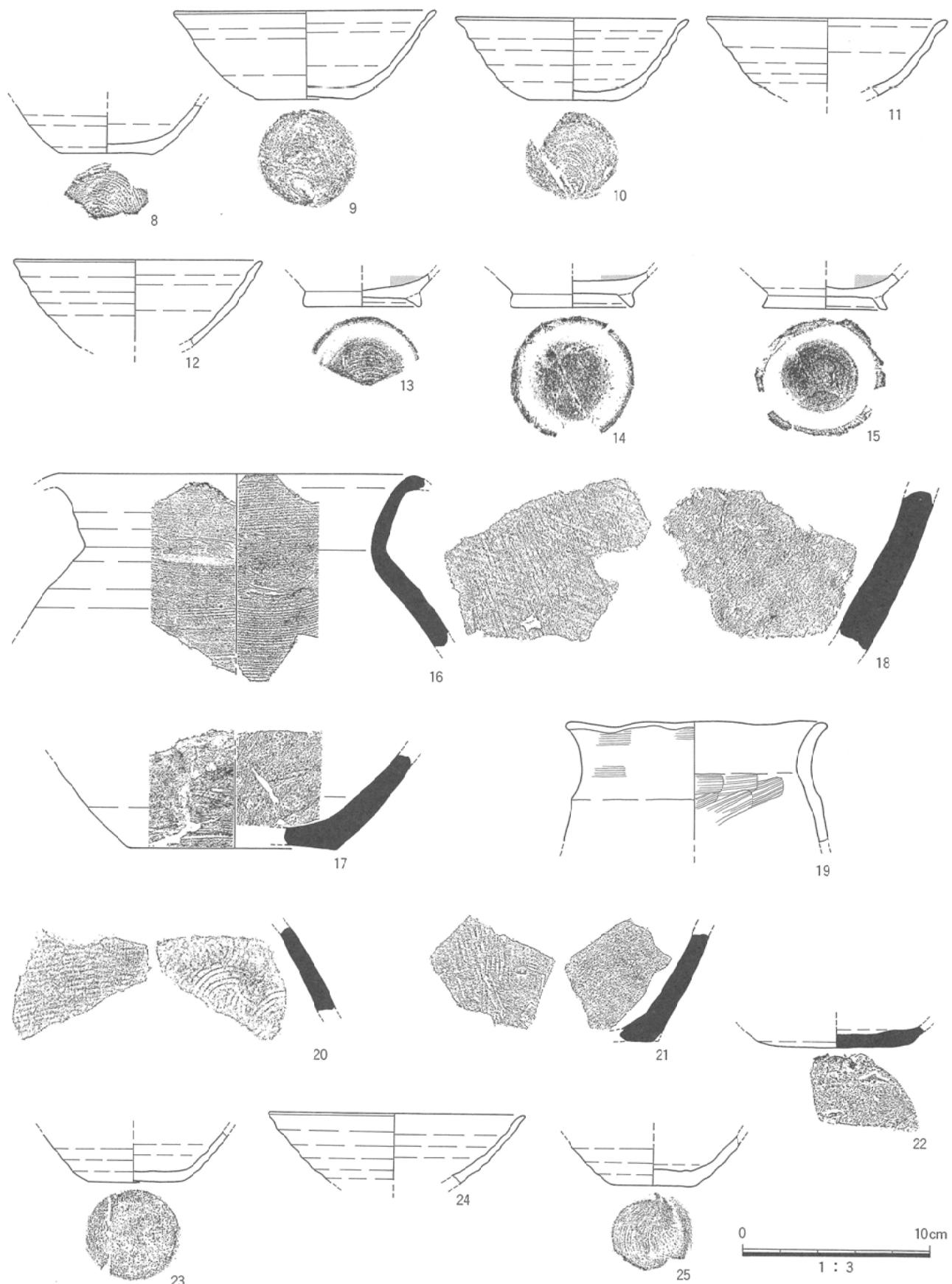
28・29はトレンチから出土した赤焼土器の壺で、28は底部の切り離しが回転糸切り、29は二次加熱を受け摩滅が激しく底部切り離しは不明である。器形はいずれも直線的に立ち上がる。

30・31はグリッド出土の須恵器の高台付壺の底部資料である。2点とも底部切り離しは回転糸切りである。そして、30は外面下部に自然釉が付着し、31は底部に墨の付着が認められ墨皿に転用している。

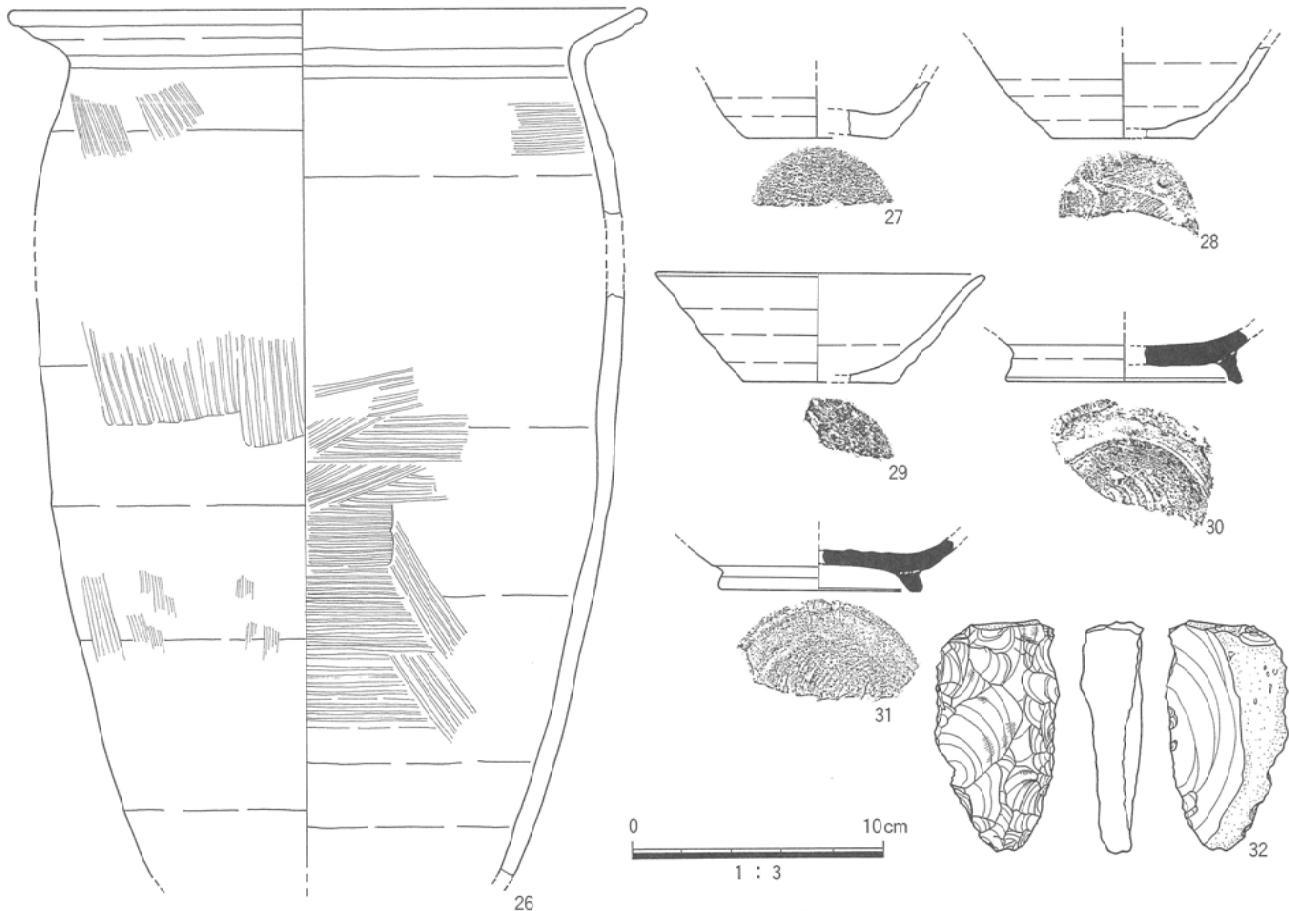
石器は1点のみで、32はグリッド出土の未製品の石範である。主要剥離面のみに調整加工が施され、背面側には表皮と素材面を、そして基部に表皮を残す。長さ89.8mm、幅46.4mm、厚さ24.3mm、重さ111.4gを測り、石材は珪質頁岩製である。



第15図 S T134・S B325・S K141・152出土遺物



第16図 SK 152・SD 2・3・SX 89・164出土遺物



第17図 E U 104 · S P · 包含層出土遺物

表1 土器観察表

捕図番号	種別	器種	計測値(mm)				色調	底部切離	調整技法		出土地点	登録番号	備考	
			口径	底径	器高	器厚			外面	内面				
15	赤焼土器	壺	(134)	(54)	42	4	10Y R8/3浅黄橙		ロクロ	ロクロ	S T134 F			
	赤焼土器	壺		(70)	[42]	5	7.5Y R8/3浅黄橙		ロクロ	ロクロ	S T134-EP7 F		二次加熱有り	
	赤焼土器	甕	(170)		[114]	6	7.5Y R6/4にぶい橙		ロクロ	ロクロ	S B325-EB1	R P 6		
	赤焼土器	壺		124	52	39	4 7.5Y R8/4浅黄橙		ロクロ	ロクロ	S K141 F1	R P 2		
	赤焼土器	壺		(50)	[26]	5	10Y R8/2灰白		ロクロ	ロクロ	S K141 F			
	赤焼土器	壺		(54)	[19]	6	10Y R8/2灰白		回転糸切	ロクロ	S K152 F			
	赤焼土器	壺		52	[16]	3	7.5Y R6/4にぶい橙		回転糸切	ロクロ	S K152 F			
16	赤焼土器	壺		(52)	[27]	4	10Y R8/3浅黄橙		回転糸切	ロクロ	S K152 F			
	赤焼土器	壺	(140)	52	47	4	7.5Y R8/4浅黄橙		回転糸切	ロクロ	S K152 Y	R P 5		
	赤焼土器	壺	(124)	48	44	3	7.5Y R7/4にぶい黄橙		回転糸切	ロクロ	S K152 F	R P 3		
	赤焼土器	壺	(128)		[41]	4	7.5Y R7/4にぶい黄橙		ロクロ	ロクロ	S K152 F			
	赤焼土器	壺	(130)		[52]	4	7.5Y R7/4にぶい黄橙		ロクロ	ロクロ	S K152 F		二次加熱有り	
	内黒土器	高台付壺	(64)	[17]	4	5Y R7/6橙		回転糸切	ロクロ	ロクロ	S K152 F		内面黑色処理	
	内黒土器	高台付壺		64	[19]	5	7.5Y R8/4浅黄橙		ロクロ	ロクロ	S K152 F		内面黑色処理・二次加熱有り	
17	内黒土器	高台付壺	(66)	[19]	5	7.5Y R7/4にぶい橙		ロクロ	ロクロ	S K152 F	R P 4	内面黑色処理		
	須恵器	壺	(204)		[92]	11	N 5/灰		ロクロ	ロクロ・カキ目	S K152 F		短頭壺	
	須恵器	壺		(110)	[51]	11	7.5Y R7/3にぶい橙		範削り	ロクロ	S K152 F			
	須恵器	甕			17	N 5/灰			平行タタキ目	アテ痕	S K152 F			
	土師器	甕	(140)		[65]	5	5 Y R5/4にぶい赤褐		ナデ	刷毛目	S K152 F			
	須恵器	甕			[45]	9	N 5/灰		タタキ	同心円アテ痕	S D 2 F			
	須恵器	甕			[53]	9	N 5/灰		タタキ	アテ痕	S D 2 F			
17	須恵器	壺	(58)	[12]	5	N 6/灰		回転窓切	ロクロ	ロクロ	S D 3 F			
	赤焼土器	壺		50	[25]	4	5Y R7/6橙		ロクロ	ロクロ	S X89 F			
	赤焼土器	壺	(137)		[37]	3	7.5Y R6/4にぶい橙		ロクロ	ロクロ	S X164 F 3		燈明皿転用	
	赤焼土器	壺		(44)	[27]	5	7.5Y R8/4浅黄橙		ロクロ	ロクロ	S X164 F			
	土師器	甕	(250)	(345)	7	7.5Y Rにぶい橙			刷毛目	刷毛目	E U104	R P 1	底部穿孔	
	赤焼土器	壺		(58)	[23]	5	7.5Y R8/4浅黄橙		ロクロ	ロクロ	S P298			
	赤焼土器	壺		(56)	[37]	4	7.5Y R7/6橙		回転糸切	ロクロ	ロクロ	トレンチ		
17	赤焼土器	壺	(130)	(60)	43	4	7.5Y R7/6橙		ロクロ	ロクロ	トレンチ		二次加熱有り	
	須恵器	高台付壺		(93)	[21]	5	N 5/灰		回転糸切	ロクロ	ロクロ	16-13G		外面下部自然釉
	須恵器	高台付壺		(80)	[21]	5	N 6/灰		回転糸切	ロクロ	ロクロ	19-18G		底部転用硯(墨皿)

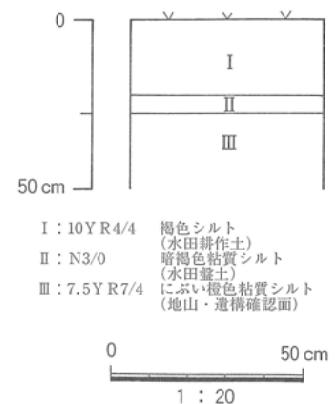
IV 樋渡遺跡

1 基本層序

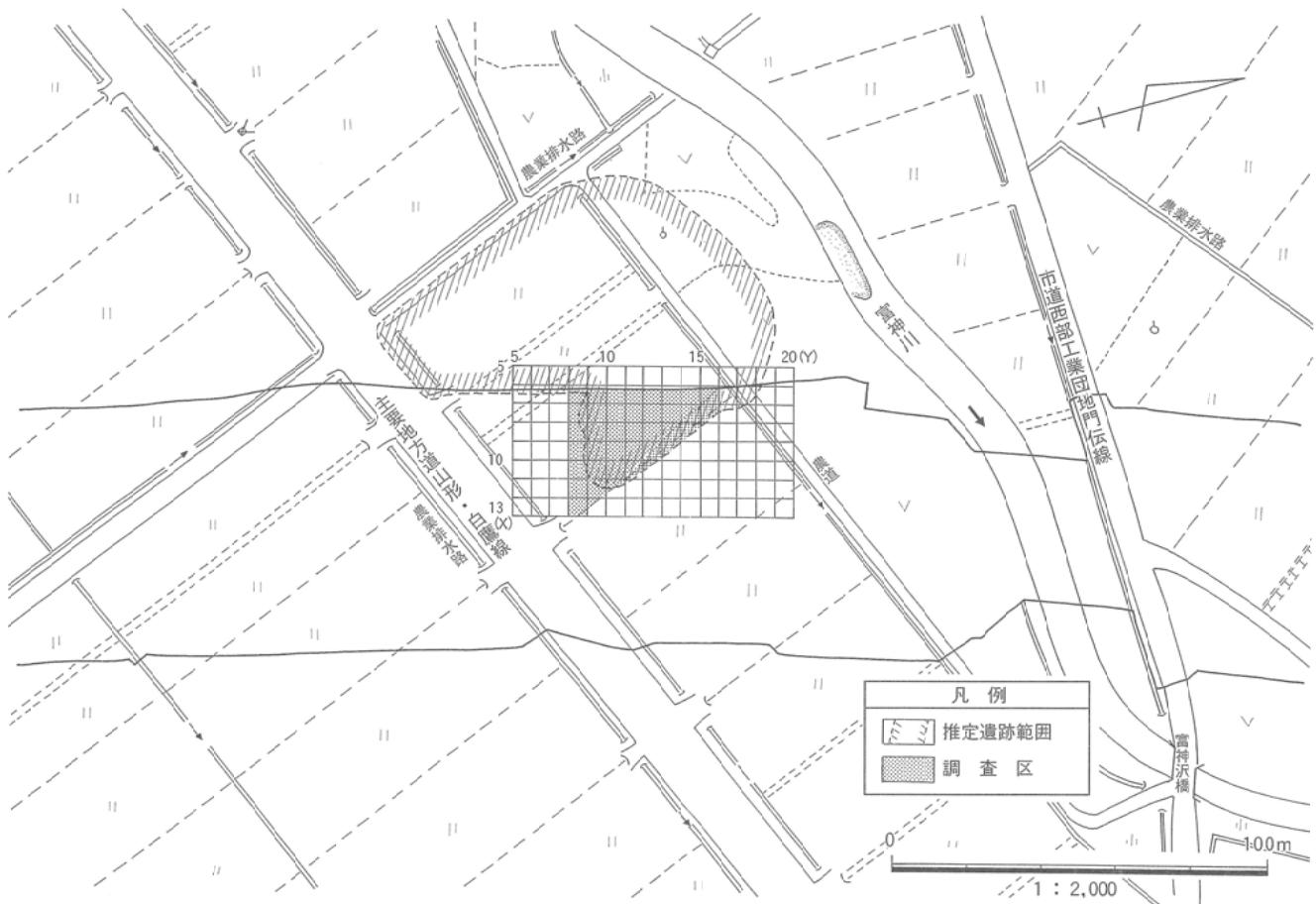
遺跡は、北側を流れる富神川が形成する自然堤防の微高地と、南側を走る主要地方道山形・白鷹線の間の水田段差のある地形に立地する。調査区は、西側の水田よりも一段低く、東側の水田よりも一段高い地形であり、近年の基盤整備事業の切り盛り整地のためにかなり削平されていた。

遺構確認面までの深さは約20~30cmを測り、削平のためか、浅くなっている。但し、調査区南側に比較して北側が確認面まで若干深くなる傾向が認められた。

層序は3層に大別され、I層は褐色シルトの耕作土で、草の根を含み柔らかい。II層は、暗灰色粘質シルトで水田盤土と推測され、約5cm程の厚さで堆積している。III層が地山で遺構の確認面となる。地山は、にぶい橙色シルトで砂利を混入し、部分的に酸化土が混じる。なお、遺物の包含層は確認されなかった。



第18図 遺跡層序



第19図 調査区概要図(S=1:2,000)

2 遺構と遺物の分布

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡・土坑・溝跡・性格不明の落ち込み・柱穴などで、出土した遺物は奈良・平安時代の土器を主に整理箱3箱である。但し、昭和40年代のほ場整備や基盤整備事業のため攪乱・削平を受け、遺存状態は良くない。

遺構の分布は、大半が調査区西側に存在し、東側は溝跡2条と土坑数基のみである。但し、西側も中央付近7~9-12・13Gに掘立柱建物跡と土坑7基が密集し、周辺に性格不明の落ち込みと柱穴が存在し、1ヶ所に主要な遺構が集中する傾向が見られる。

遺物の出土状況は、大半が遺構の集中している西側中央付近7~9-12・13Gの土坑群と東側と東南隅に検出された溝跡から出土したが、全体に稀薄で遺存状態も悪く、一括土器は土坑群から出土した土師器の甕のみであった。また、土坑群と接する掘立柱建物跡の柱穴から柱痕が出土している。

但し、土坑群の出土遺物が土師器のみに限られるのに対し、溝跡からは土師器片の他に須恵器片が含まれる特徴が見られ、しかも県内でも出土例が少ない緑釉陶器がSD1から出土した。

主たる遺構が西側に集中していることや、今年度の調査区が遺跡の東端にあたることを考慮すると、集落の中心は調査区西側にあると考えられる。

3 検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡1棟・溝跡2条・土坑・性格不明遺構・柱穴などである。時期は、概ね奈良・平安時代と推測される。調査区が攪乱・削平を受けているため遺存状態は良くない。以下に主な遺構の概要を述べる。

(1) 掘立柱建物跡

S B95掘立柱建物跡(第21図 図版16)

調査区西側中央、8·9-12·13Gで検出され、土坑群(S K)・性格不明遺構(S X)と重複する建物跡で西側の柱穴が判然としない。規模は、東西3間×南北2間で中央に柱を持つ総柱の建物跡と考えられるが、SP83·86に対応する柱穴は検出されなかった。南北軸は磁北から東に1度50分傾くが、ほぼ磁北に一致する。柱間の距離は東西が約1.4m、南北が約2.0mを測る。

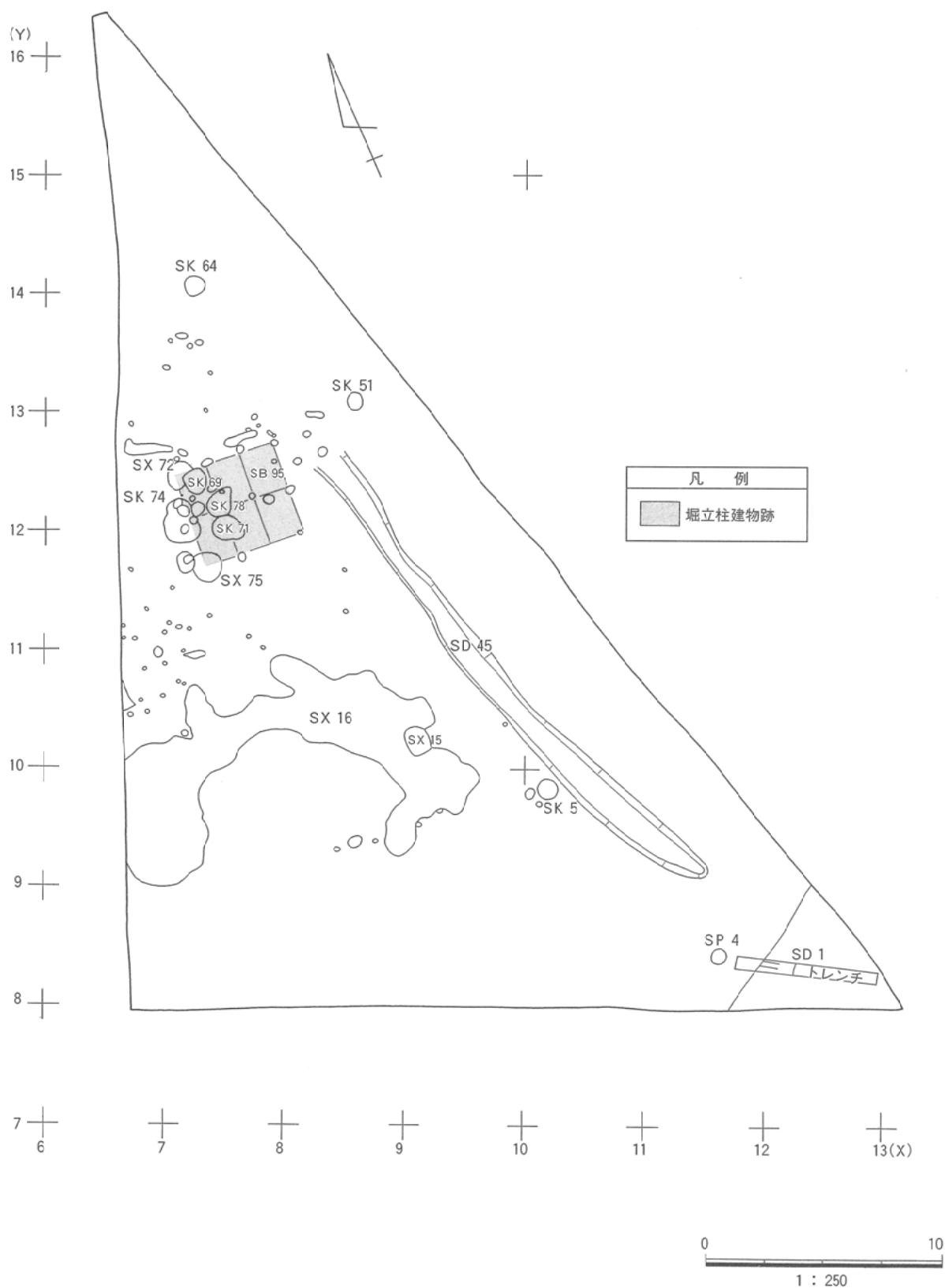
柱穴の規模は長径30~60cm、短径20~40cmの橢円形を呈し、確認面からの深さは約10~30cmを測る。遺物は、SP66から柱痕が出土した。

(2) 土坑・性格不明遺構(第22図 図版17·18)

調査区西側中央、8-12·13Gで検出された土坑・性格不明遺構群で、S B95を構成する柱穴などを切ると考えられ、土坑・性格不明遺構の底面から柱穴と推測される掘り込みが検出された。各土坑・性格不明遺構について概略を述べる。

S K69の平面プランは、長径110cm・短径100cmの不整円形を呈し、確認面からの深さ30cmを測り、S X72を切る。断面形は壁面が斜めに掘り込まれ底面はほぼ平坦な台形状になる。遺物は、土師器の甕が出土した。

S K71は、平面プランが長径140cm、短径100cmのたまご形を呈し、確認面からの深さ20cmを



第20図 遺構配置図 (S = 1 : 250)

測り、S P 77の上に構築されると考えられる。断面形は壁面が緩やかに掘り込まれ、底面がほぼ平坦なレンズ状になると推定される。遺物は、土師器の甌や甕、内黒土器の壺などが出土している。

S X 72は、平面プランが長径130cm、短径70cm以上を測る楕円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは20cmである。東側をS K 69に切られる。遺物は、刷毛目調整が施される土師器の甕破片が出土している。

S K 73は、平面プランが長径110cm、短径90cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ15cmを測り、S K 74を切り、S P 82・92の上に構築されたと考えられる。断面形は壁面がほぼ垂直に掘り込まれ底面中央が最深部となる五角形となる。遺物の出土は無い。

S K 74は、北側をS K 73に切られる長径160cm、短径110cm以上の楕円形の平面プランを呈する。確認面からの深さは25cmを測り、S P 82・94の上に構築され断面形はレンズ状となる。遺物は、内面に刷毛目調整が確認できる土師器の甕破片が1点出土した。

S X 75は、平面プランが径140cmを測るほぼ円形を呈する。確認面からの深さは50cmを測り、壁面は急角度に掘り込まれ中央部が最深部となる。底面は凹凸があり、西側をS P 80に切られる。遺物は、土師器の破片が2点出土した。

S X 78は、平面プランが長径130cm、短径100cmのたまご形を呈し、確認面からの深さ30cmを測り、断面形は壁が緩やかに掘り込まれ底面がほぼ平坦となる台形状となる。また、西側でS K 88を南側でS K 71を切る。遺物は、覆土中から白磁の破片と須恵器の甕の破片及び土師器の破片などが出土した。

S K 88は、平面プランが長径80cm、短径70cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さ25cmを測る。東側をS K 78に、西側をS K 73・74に切られる。遺物の出土は無い。

(3) 溝 跡(第23図 図版19)

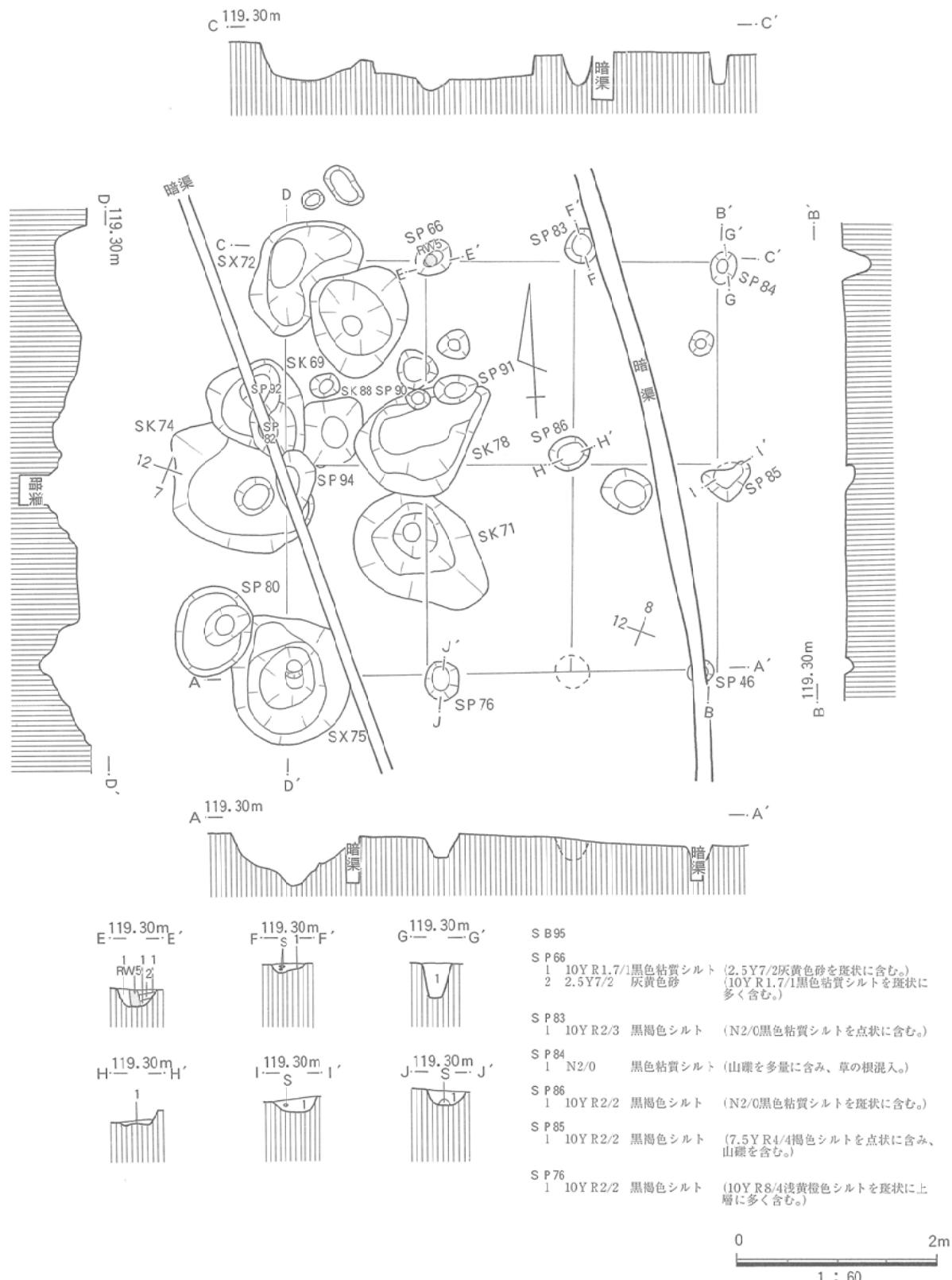
S D 1溝跡

調査区南東隅、12・13-9・10Gで検出された幅5.0m以上、長さ6.0m以上で調査区外の東西両方向に延びると推定される。深さは、最深部で約95cmを測り、断面形は壁が緩やかに掘り込まれ底面はほぼ平坦となるレンズ状に近い形を呈する。

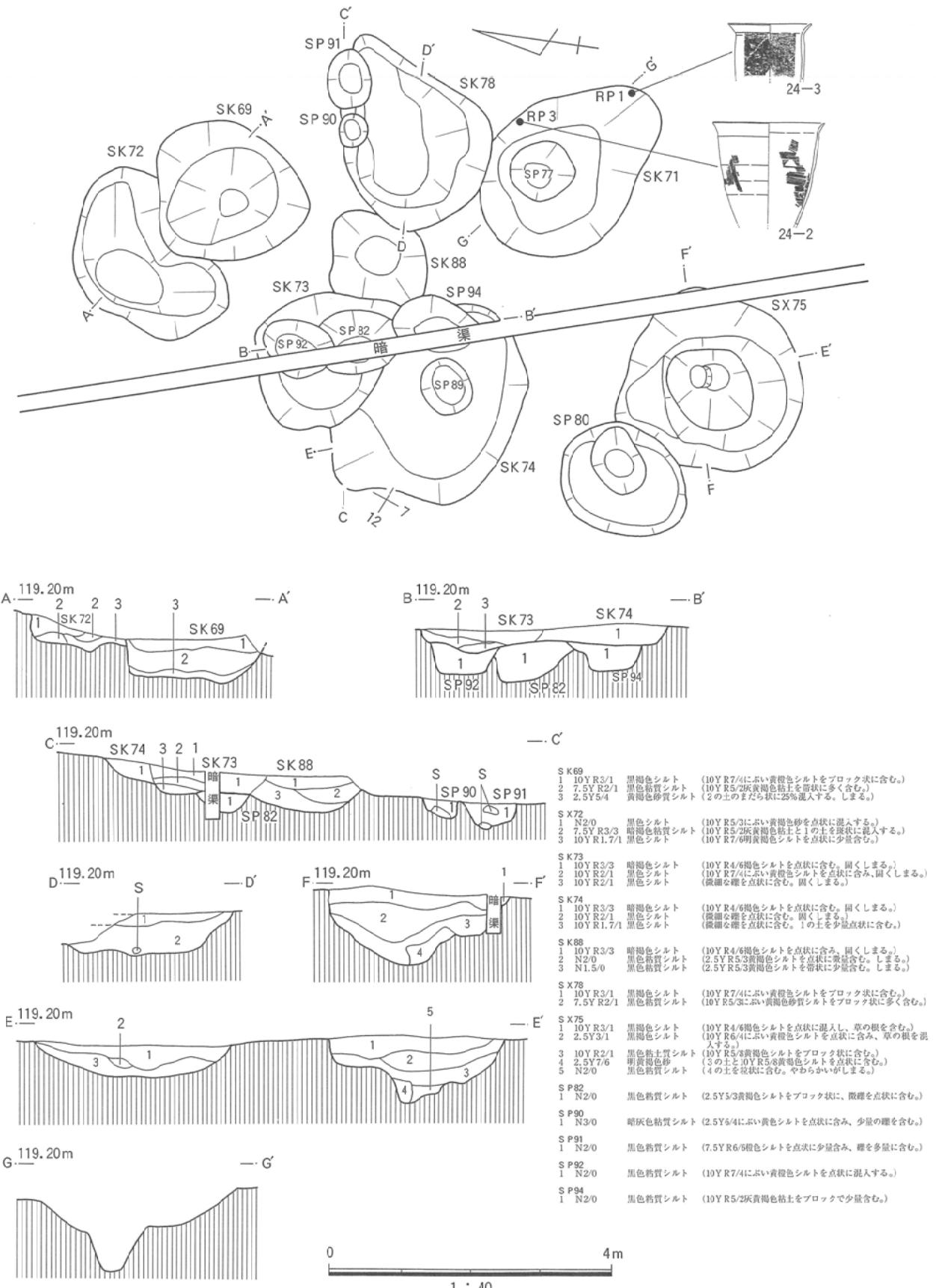
覆土は8層に分かれ、上層には褐灰色または灰色のシルト、中層には黒色の粘土、最下層には黄灰色粘土が主に堆積し、第3層には炭化物を混入する。そして、第7・8層はブロック状又は帯状に小範囲で堆積し覆土中には河原石や礫を多く含む。遺物は、須恵器の壺・甕、赤焼土器の壺・高台付壺・甕、土師器の甕、内黒土器の高台付壺の他に緑釉陶器の碗が出土した。

S D 45溝跡

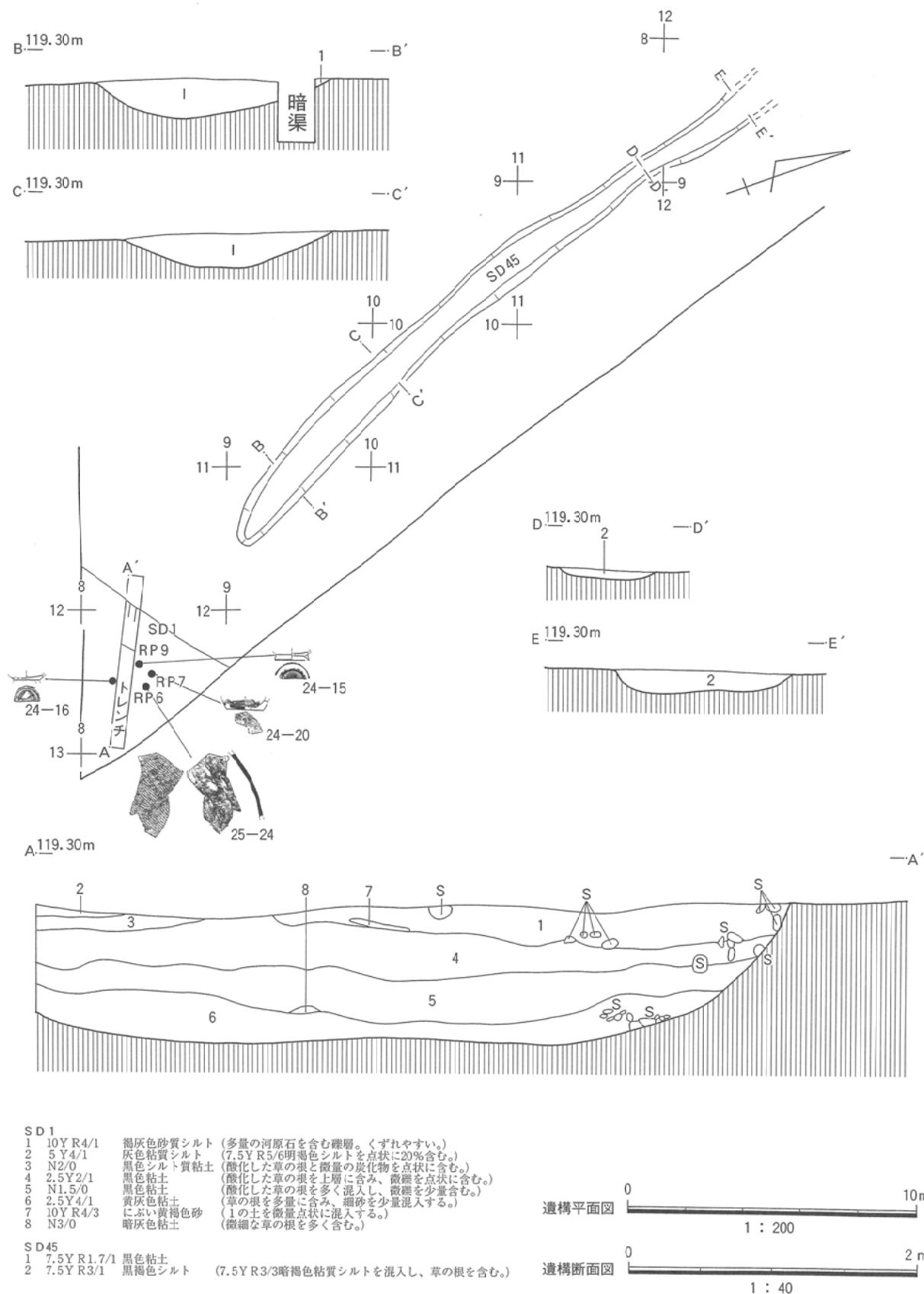
調査区東側、9~12-10~13Gで検出され、南北軸に沿う溝跡であるが、北側は検出されなかった。幅0.7~1.6m、長さ23m以上で、確認面からの深さは10~30cmを測る。断面形は南側で、中央部が深く弧を描き壁面が緩やかに立ち上がるレンズ状を、北側で壁面が急角度で掘り込まれ底面が平坦となる台形状を示す。遺物は、須恵器の蓋・壺・高台付壺、赤焼土器の壺・高台付壺・甕などが出土した。



第21図 S B 95掘立柱建物跡



第22図 SK 69・71・73・74・78・88土坑・SX 72・75性格不明構他



第23図 SD 1・45溝跡

4 出土した遺物

今回の調査では石器・土器・陶磁器・柱痕など縄文時代・奈良・平安時代の遺物が整理箱に3箱出土した。但し、大半の土器は遺存状態が悪く小破片が多く、掲載できたものは50点程で完形・略完形品は極めて少ない。また、石器が1点出土したが、縄文時代の遺構及び土器等の検出・出土が無いことから混入と考えられる。

以下に各遺物の概略を遺構毎もしくは器種毎に述べる。

S K 69の土器(第24図 図版20)

土師器の甕が1点出土した。1は二次加熱を受け器面が荒れているが、内外面に刷毛目とナデ調整が認められる。器形は体部が細長く口縁部が強く外反する。

S K 71の土器(第24図 図版20)

土師器では、器形から甕と考えられる2と甕(3)、内黒土器の壺(4)を図示した。2・3は共に二次加熱を受け器面が荒れている。2は口縁部が緩やかに外反する器形となり、内面に刷毛目、外面に刷毛目とナデ調整が認められる。3は体部が細長く口縁部が外反する1と同じ器形で外面に刷毛目・ナデ調整が認められる。

4は内黒土器の壺で、外面にケズリと刷毛目調整が内面に黒色処理とミガキが施される。但し、遺存状態が悪く底部切り離しは不明である。体部が丸味を持ち、口唇部がやや外反する器形となる。

S K 78の土器(第24図 図版20)

土師器の甕の底部片(5)と流れ込みと考えられる中世の白磁(6)がある。5は内面に刷毛目調整、底部に木葉痕が認められる。

6は覆土の1層目から出土した、内外面に白磁釉が施釉される皿の口縁部と考えられ、所属時期は15世紀前半頃と推測される資料である。

S D 1の土器(第24・25図 図版20・21)

須恵器の壺・甕、赤焼土器の壺・高台付壺・甕、緑釉陶器などが出土している。7・8は須恵器の壺で、7は底径が大きく、底部切り離しは静止糸切りで外面底部に回転範削り調整が施される。8は底径が小さく底部切り離しが回転糸切りである。9~13は赤焼土器の壺で、9・12・13は底径が大きく、体部が直線的に立ち上がる。10・11は底径がやや小さく、体部がやや丸味をもって立ち上がる。底部の切り離しは、不明の10以外は全て回転糸切りとなり、11は2次加熱を受けている。14は内黒土器の壺で、内面に黒色処理が施されるが、摩滅が激しく内面調整及び底部切り離しは不明である。外面底に煤が付着する。15・16は赤焼き土器の高台付壺で、16は高台が剥落している。15のみ底部切り離しと調整が確認でき、回転糸切りでナデ調整が施される。17は内黒土器の高台付壺であるが、摩滅が激しく内面の黒色処理の大半が剥がれ落ち、調整も判別できない。高台が低いのが特徴である。18・19は赤焼土器の甕の口縁部資料で、両者共口クロ整形で頸部かくの字に外反する。20は土師器の甕の底部資料で、内面にケズリと刷毛目が、外面にケズリが施され、底部には木葉痕が認められる。

21は緑釉陶器の碗で、素地は灰色で硬質の須恵器質である。付け高台で外面下部にケズリの

調整を施していると考えられ、施釉は濃緑釉刷毛塗りで、高台底部にも施釉される。愛知県尾北窯の所産と考えられ、時期は猿投窯の90号窯式期に比定され、9世紀後半から末と推定される。22~25は須恵器の甕体部の破片資料で、22は外面の肩部に刷毛目そして体部にタタキ目、内面にアテ痕が認められる。23は外面に平行タタキ目、内面にアテ痕が、24は外面に平行タタキ目、内面に青海波アテ痕、25は外面に格子状タタキ目、内面にアテ痕がそれぞれ認められる。

S D 45の土器(第25図 図版21・22)

須恵器の蓋・坏・高台付坏及び赤焼土器の坏・高台付坏・甕の出土がある。26は天井部に回転窓削りが施される須恵器蓋である。27~31は須恵器坏で、27・28は底部切り離しが回転窓切りで底径がやや大きい。27は外面下部に回転窓削りが施される。29・30は共に底部切り離しが回転糸切りで、底径がやや大きい。31は口縁部の破片資料で、口縁部が外反する。32は須恵器の高台付坏で、高台部分が欠損している。底部切り離しは回転糸切りでヘラ描きが底に認められる。

33~37は赤焼土器の坏で、35~37は底部切り離しの回転糸切りが確認できるが、他は摩滅が激しく不明である。36は底径がやや大きく体部に丸味をもつが、他は底径が小さい。38は赤焼土器の高台付坏で、摩滅が激しく底部切り離し、調整は不明。39は赤焼土器の甕の底部から体部にかけての資料で、体部は丸味をもって立ち上がる。二次加熱を受けている。

遺構外出土の土器・石器(第26図 図版22)

遺構外からは、須恵器の坏・高台付坏・甕、赤焼土器の坏・高台付坏、内黒土器の坏・高台付坏、石器が出土している。

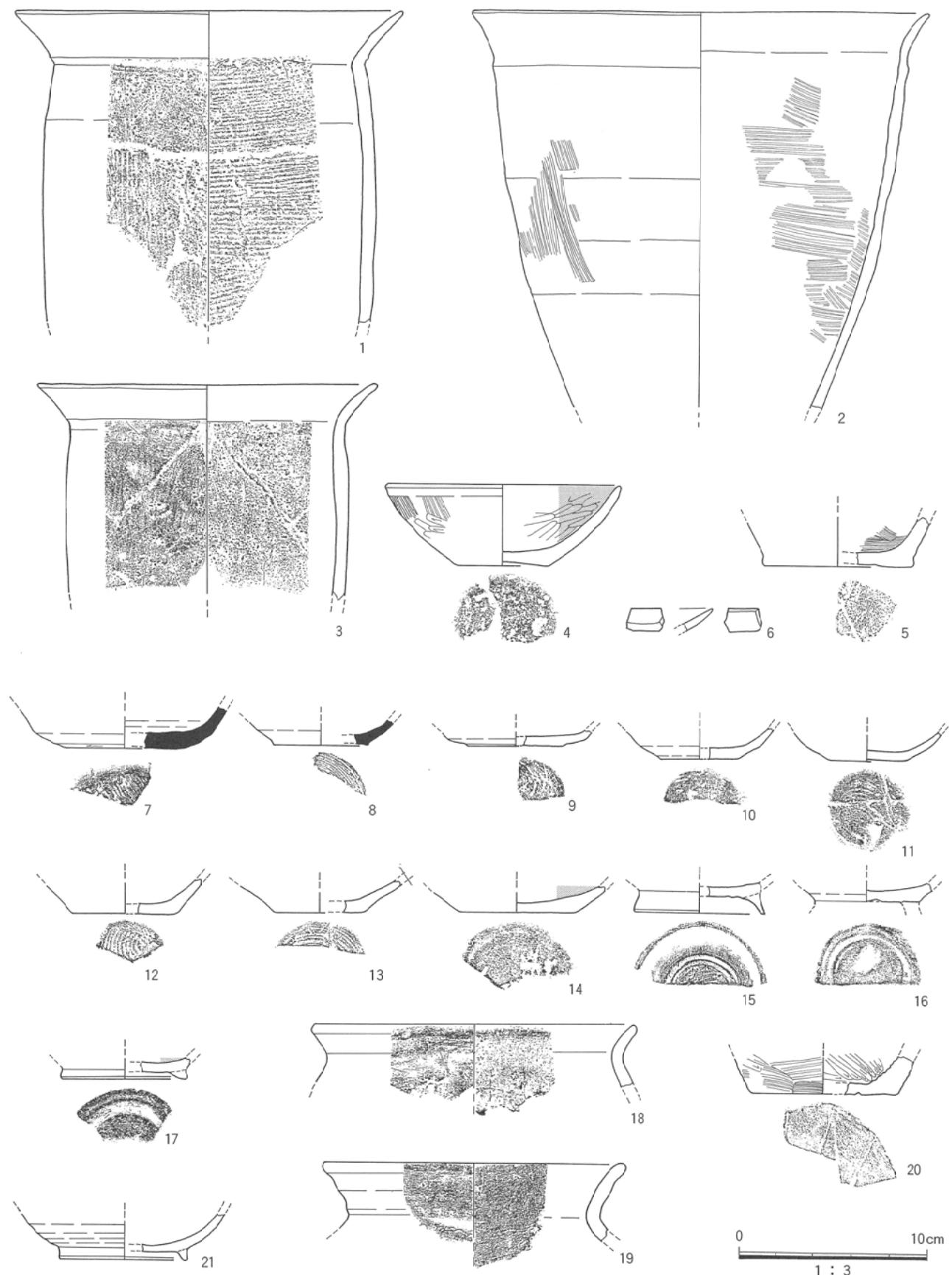
40~44は須恵器の坏で、底部切り離しは40・41が回転窓切りで、42~44は回転糸切りとなる。40・41に比較して42~44は底径が小さく、底部切り離しの違いからも新しい時期のものと考えられる。45は須恵器の高台付坏で、46は須恵器の綾碗と考えられる。底部切り離しは両者共に回転糸切りで、ナデ調整が認められる。

47・48は赤焼土器の坏で、47は底部切り離しが回転糸切りとなるが、48は摩滅が激しく確認できない。49・50は赤焼土器の高台付坏で、底部切り離しは回転糸切りとなるが、49は切り離し後、回転窓ケズリ調整を施している。また、50は高台部分が剥落し摩滅が激しい。

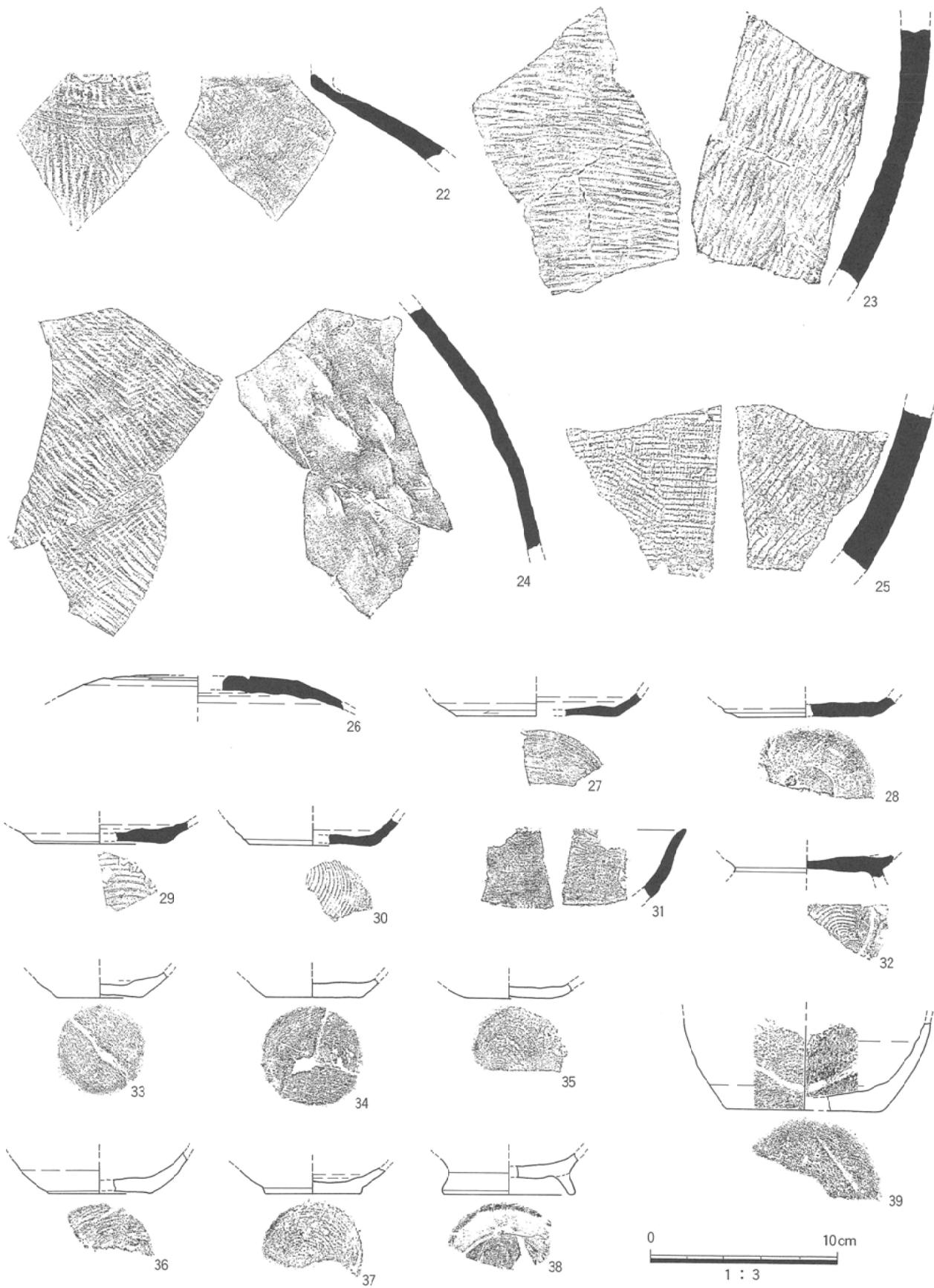
51・52は内黒土器で、51が坏、52が高台付坏である。両者共内面に黒色処理が施されているが、摩滅が激しく調整は不明である。底部切り離しは51は回転糸切りと推測され、外面下部に、回転窓ケズリが認められる。52は不明である。

53~55は須恵器の甕破片の体部及び底部資料で、53は外面に刷毛目・格子状タタキ目が内面には青海波アテ痕が施され、54は外面に平行タタキ目、内面にアテ痕が認められる。55は底部の破片資料で、外面にタタキ目、内面にアテ痕が認められる。

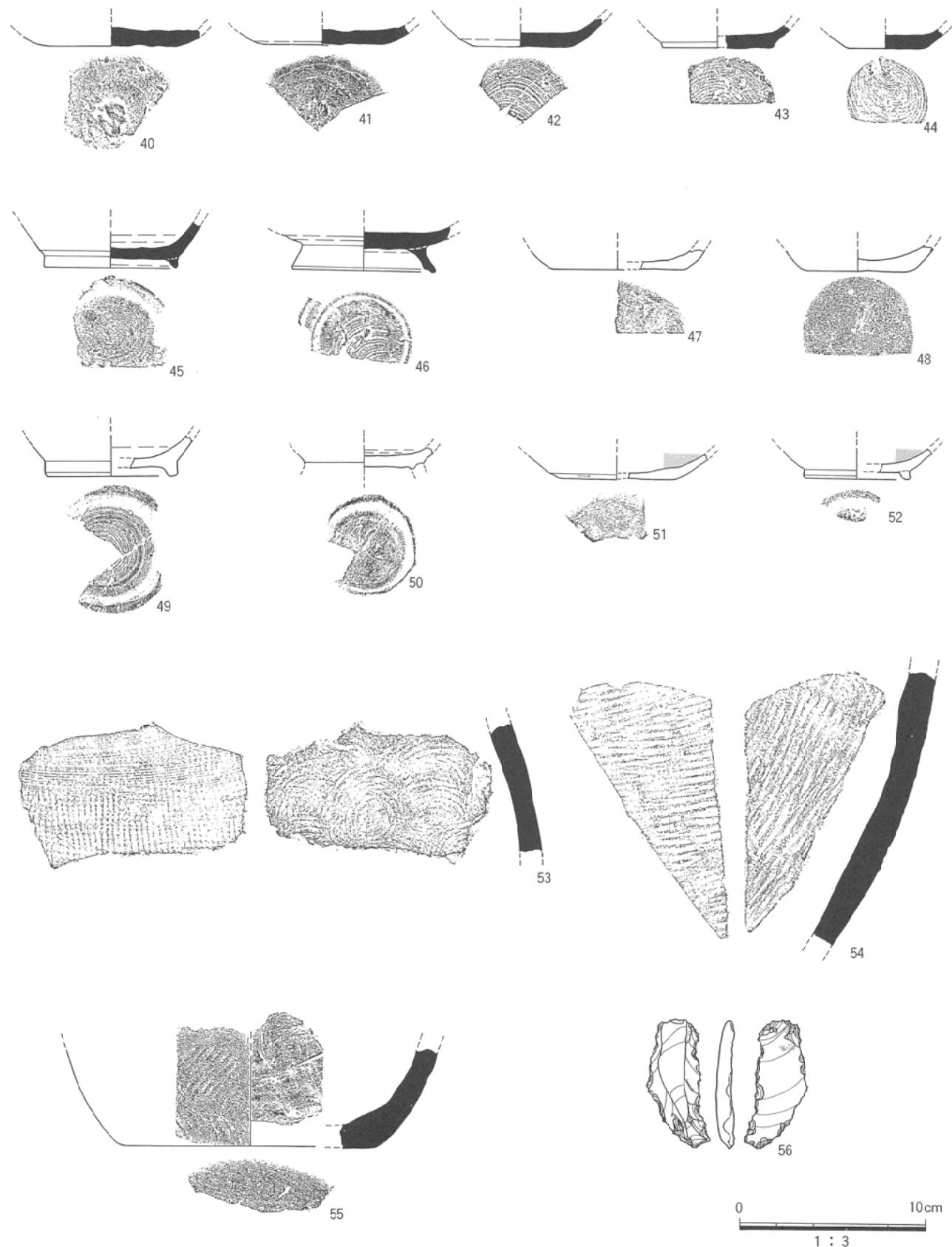
56は石材が珪質頁岩の削器と推定される。背面側の両側縁及び先端部に調整加工が施され、主要剥離面は左側縁と右側縁の上部と下部及び先端部に調整加工が施され、基部を除く三縁辺が刃部となり得る。長さ69.5mm、幅25.9mm、厚さ7.6mm、重さ19.1gを測る。



第24図 SK 69・71・78・SD 1 出土遺物



第25図 SD 1・45出土遺物



第26図 包含層出土遺物

表2 土器観察表

插図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)				色調	底部切離	調整技法		出土地点登録番号	備考
				口径	底径	器高	器厚			外面	内面		
24	1	土師器	壺	(206)	[168]	7	7.5YR8/4浅黄橙			刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	SK6F	二次加熱有り
	2	土師器	甌	(244)	[213]	5	7.5YR8/3浅黄橙			刷毛目・ナデ	刷毛目	SK7F・RP3	二次加熱有り
	3	土師器	壺	178	[140]	7	7.5YR8/2灰白			刷毛目・ナデ		SK7F・RP1	二次加熱有り
	4	内黒土器	壺	(124)	50	43	6	10YR8/4浅黄橙		ケズリ・刷毛目	ミガキ	SK7F	内面黒色処理
	5	土師器	壺	(78)	[24]	7	5YR6/6橙			刷毛目		SK7F	底部木葉痕
	7	須恵器	壺	(62)	[22]	6	2.5Y7/1灰白	静止糸切・回転範削	ロクロ	ロクロ		SD1F4	外面下部回転範削
	8	須恵器	壺	(49)	[13]	4	7.5YR7/3にぶい橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD1F5	
	9	赤焼土器	壺	(50)	[8]	4	10YR8/3浅黄橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD1F5	
	10	赤焼土器	壺	(42)	[16]	4	10YR8/3浅黄橙		ロクロ	ロクロ		SD1F5	
	11	赤焼土器	壺	39	[16]	3	10YR8/2灰白	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD1F5	二次加熱有り
	12	赤焼土器	壺	(54)	[18]	5	10YR6/3にぶい橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD1F5	
	13	赤焼土器	壺	(48)	[17]	5	10YR6/3にぶい橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD1F5	
	14	内黒土器	壺	(62)	[14]	5	10YR8/2灰白		ロクロ	ロクロ		SD1F5	内面黒色処理・外面底に煤付着
	15	赤焼土器	高台付壺	(72)	[16]	5	5YR7/4にぶい橙	回転糸切・ナデ	ロクロ	ロクロ		SD4F・RP9	
	16	赤焼土器	高台付壺	(54)	[10]	5	7.5YR7/3にぶい橙		ロクロ	ロクロ		SD4F・RP8	高台部分剥落
	17	内黒土器	高台付壺	(68)	[11]	5	10YR8/2灰白		ロクロ	ロクロ		SD1F5	内面黒色処理
	18	赤焼土器	壺	(170)	[35]	6	5YR6/4にぶい橙		ロクロ	ロクロ		SD1F1	
	19	赤焼土器	壺	(162)	[41]	6	10YR8/2灰白		ロクロ	ロクロ		SD1F5	
	20	土師器	壺	(78)	[18]	11	10YR8/3浅黄橙		ケズリ・刷毛目	ケズリ		SD1F5・RP7	底部木葉痕
25	22	須恵器	壺			9	7.5YR5/1褐灰			刷毛目・タタキ目	アテ痕	SD1F5	
	23	須恵器	壺			13	N4/ 灰			平行タタキ目	アテ痕	SD1F5	
	24	須恵器	壺			8	N4/ 灰			平行タタキ目	青海波アテ痕	SD1F4・RP6	
	25	須恵器	壺			17	5Y6/1灰			格子状タタキ目	アテ痕	SD1F5	
	26	須恵器	蓋		[17]	6	N7/ 灰白		ロクロ	ロクロ		SD4F	天井部回転範削
	27	須恵器	壺	(84)	[12]	4	N5/ 灰	回転範切	ロクロ	ロクロ		SD4F	外面下部回転範削
	28	須恵器	壺	(70)	[6]	5	N6/ 灰	回転範切	ロクロ	ロクロ		SD4F	
	29	須恵器	壺	(70)	[8]	5	N5/ 灰		ロクロ	ロクロ		SD4F	
	30	須恵器	壺	(68)	[14]	5	N4/ 灰	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD4F	
	31	須恵器	壺		[37]	6	N6/ 灰		ロクロ	ロクロ		SD4F	
	32	須恵器	高台付壺	(75)	[12]	7	N6/ 灰	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD4F	底部ヘラ描き
	33	赤焼土器	壺	44	[11]	4	7.5YR8/2灰白		ロクロ	ロクロ		SD4F	
	34	赤焼土器	壺	50	[9]	5	7.5YR6/4にぶい褐					SD4F	
	35	赤焼土器	壺	46	[4]	5	10YR8/3浅黄橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD4F	
	36	赤焼土器	壺	(56)	[17]	5	10YR8/2灰白	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD4F	
	37	赤焼土器	壺	51	[12]	5	10YR8/2灰白	回転糸切	ロクロ	ロクロ		SD4F	
26	38	赤焼土器	高台付壺	(68)	[18]	6	7.5YR8/4浅黄橙		ロクロ	ロクロ		SD4F	
	39	赤焼土器	壺	(82)	[48]	6	5YR7/6橙		ロクロ	ロクロ		SD4F	二次加熱有り
	40	須恵器	壺	(68)	[9]	5	N6/ 灰	回転範切	ロクロ	ロクロ		11-10G	
	41	須恵器	壺	(65)	[10]	5	N6/ 灰	回転範切	ロクロ	ロクロ		11-10G	
	42	須恵器	壺	(52)	[15]	5	N6/ 灰	回転糸切	ロクロ	ロクロ		9-12G	
	43	須恵器	壺	(58)	[12]	4	5B6/1青灰	回転糸切	ロクロ	ロクロ		13-9G	
	44	須恵器	壺		[42]	5	5YR7/4にぶい澄	回転糸切	ロクロ	ロクロ		8-10G	
	45	須恵器	高台付壺	(70)	[23]	5	5B4/1暗青灰	回転糸切・ナデ	ロクロ	ロクロ		11-10G	
	46	須恵器	綾碗?		[76]	6	N5/ 灰	回転糸切・ナデ	ロクロ	ロクロ		11-10G	
	47	赤焼土器	壺	(70)	[10]	6	7.5YR8/4浅黄橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		11-9G	
	48	赤焼土器	壺	58	[14]	6	7.5YR6/3にぶい褐					6-15G	
	49	赤焼土器	高台付壺	70	[21]	5	10YR8/3浅黄橙	回転糸切・回転範削	ロクロ	ロクロ		12-9G	
	50	赤焼土器	高台付壺	(53)	[12]	5	10YR8/4浅黄橙	回転糸切	ロクロ	ロクロ		11-10G	
	51	内黒土器	壺	(58)	[12]	4	10YR7/3にぶい黄橙	回転糸切?	ロクロ	ロクロ		13-9G	外面下部回転範削
	52	内黒土器	高台付壺	(56)	[16]	5	10YR7/3にぶい黄橙					12-9G	内面黒色処理
	53	須恵器	壺			12	5Y6/1灰		刷毛目・格子状タタキ目	青海波アテ痕		9-12G	
	54	須恵器	壺			16	N5/ 灰		平行タタキ目	アテ痕		11-10G	
	55	須恵器	壺	(132)	[51]	11	5Y6/1灰		タタキ目	アテ痕		12-9G	

表3 陶磁器観察表

插図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)				色調			出土地点登録番号	備考
				口径	底径	器高	器厚	内面	外 面	胎 土		
24	6	白磁	皿			[12]	4	7.5Y7/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	10Y6/1灰色	S K7F1	白磁釉
	21	緑釉陶器	碗		(68)	[23]	4	7.5YR4/3暗オーブ色	7.5YR4/3暗オーブ色	N4/ 灰	SD1F1	綠釉

V 調査のまとめ

今回の調査は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事(上山～東根間)に伴う、百目鬼遺跡と樋渡遺跡の発掘調査である。両遺跡の調査によって得られた成果を以下に述べる。

1 百目鬼遺跡

遺跡は、山形県山形市大字百目鬼に所在し、須川左岸に広がる水田地帯の自然堤防状の微高地に立地する。

発掘調査は遺跡範囲にかかる事業実施地区、東西約60m・南北約80m・面積約4,600m²を対象に実施した。調査の結果、平安時代の集落跡、近世の祭祀跡の存在が確認された。出土遺物は整理箱にして21箱出土したが、大半は祭祀遺構から出土した桶材、骨などが占め、土器は10箱程である。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡2棟・掘立柱建物跡4棟・埋設土器1基・溝跡・土坑・性格不明遺構などである。調査区内での遺構分布は南側に多くが集中し、北側は希薄になる傾向が見られたが全体的に良好な遺構は少数であった。

E U 104埋設土器は理化学的分析の結果から、骨を埋葬した可能性が高い。しかし、検出された位置が掘立柱建物跡に隣接することから単なる埋納遺構ではなく、建物跡に関連した鎮祭遺構の可能性も考えられるが、詳細な検討が必要である。

土器は、遺存状態が悪く搅乱などの為に希薄で破片が多くを占めた。但し、赤焼土器が多く須恵器が極めて少ない傾向と供膳形態の土器において赤焼土器の壊に対し、須恵器の壊が少ない特徴が認められる。整形技法はロクロ整形で、底部の切離技法は回転糸切りが主である。

集落の主たる所属時期は、出土土器の形態・製作技法から概ね9世紀第4四半期頃と考えられる。但し、SD 2・3やグリッド出土土器に底径が大きく、底部切離技法が回転箆切りとなる9世紀前半頃に比定されるものが数点あることから、周辺に当該期の集落の存在が推測される。

近世の遺構は、SM323祭祀遺構1基が確認された。桶材や蹄鉄、骨が出土し、この地域に「馬頭觀音」が存在したという言い伝えがあることから、それに関する馬を大切に供養した施設と考えられ、時期は、骨と共に馬の蹄の裏に装着する蹄鉄が出土したことから、明治時代以降の所産と推定される。

2 樋渡遺跡

遺跡は、山形市大字富神台字樋渡に所在し、遺跡北側を流れる富神川が形成する自然堤防の微高地と水田段差のある地形に立地する。

発掘調査は遺跡範囲にかかる事業実施地区、面積約810m²を対象に実施した。調査の結果、平安時代の集落跡の存在が確認された。出土遺物は整理箱にして3箱出土し、緑釉陶器や中世の白磁片も出土している。

遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑、性格不明遺構、溝跡などが検出され、主要な遺構の分布は、西側の中央付近7～9・12・13Gに密集し、同じ場所を繰り返し利用していた様子がうかがえる。但し、竪穴住居などの遺構が検出されなかつことと、調査区が遺跡範囲の東端に当たることから、集落の中心は西側の未調査区部分に存在すると推測される。但し、SD1が東側にも延びる可能性があることから、東側にも遺構の存在が考えられる。

土器は、総体的に煮沸形態の土師器甕、貯蔵形態の須恵器甕に比較して、供膳形態の赤焼土器や須恵器の壺・高台付壺が多い傾向が認められた。壺類の整形技法はロクロ整形で、底部の切離技法は回転糸切りが多くを占めるが、静止糸切り及び回転窓切りも数点認められる。また、SD1から出土した愛知県尾北窯産の綠釉陶器は当時の流通を知る貴重な資料である。綠釉陶器は、平成11年度に調査された山形市成沢西遺跡で2点の出土報告(文献5)がなされ、県内の内陸地方の出土は当遺跡を含め2例のみである。

集落の時期は、調査区が遺跡の限られた範囲であること、遺物の遺存状態が悪く、完形・略完形品が数点という状況であり、さらなる検討を要するが、出土した土器の形態や製作技法から概ね9世紀代と推測される。

<参考文献>

- (1) 愛知県教育委員会 1983「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」
- (2) 愛知県陶磁資料館・五島美術館編 1998「日本の三彩と綠釉」
- (3) (財)山形県埋蔵文化財センター 1996「宮ノ下遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集
- (4) 山形県教育委員会 1998「分布調査報告書(25)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第199集
- (5) (財)山形県埋蔵文化財センター 1999「東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書(2)」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第68集
- (6) 第25回古代城柵官衙遺跡検討会事務局 1999「第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料」

報告書抄録

ふりがな	どめきいせき・ひわたりいせきはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	百目鬼遺跡・樋渡遺跡発掘調査報告書								
副書名									
卷次									
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書								
シリーズ番号	第96集								
編著者名	氏家信行								
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター								
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301								
発行年月日	2002年3月25日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
どめきいせき 百目鬼遺跡	やまがたけんやまがたし 山形県山形市 おおあざ どめき 大字百目鬼	6201	113	38度 13分 22秒	140度 16分 56秒	19980727 ～ 19981021	4,600	東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)建設工事	
ひわたりいせき 樋渡遺跡	やまがたけんやまがたし 山形県山形市 おおあざとかみだい 大字富神台 あざひわたり 字樋渡	6201	平成2年度登録	38度 14分 13秒	140度 16分 39秒	19980709 ～ 19980731	810		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
どめきいせき 百目鬼遺跡	集落跡	平安時代 (9世紀)	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 溝跡 埋設土器 性格不明遺構	2 4 9 8 1 3	土師器(甕) 須恵器(环・高台付环 ・甕・壺) 赤焼土器(环・甕) 内黒土器(高台付环)				掘立柱建物跡に隣接して埋設土器が検出され、建物に關係する鎮祭遺構の可能性も考えられる。
	祭祀跡	近世	祭祀遺構	1	木製品(桶材・籠) 金属製品(蹄鉄) 骨				明治時代以降の、馬を大切に供養した「馬頭観音」に關係する祭祀遺構。(総出土箱数:22)
ひわたりいせき 樋渡遺跡	集落跡	平安時代 (9世紀)	掘立柱建物 土坑 溝跡 性格不明遺構	1 6 2 2	土師器(甕・甌) 須恵器(蓋・环・綾碗?) 高台付环(甕) 赤焼土器(环・高台付环 ・甕) 内黒土器(环・高台付环) 綠釉陶器(碗)				溝跡から、愛知県尾北窯産の綠釉陶器が出土した。県内の内陸地方での出土例は当遺跡を含め2例のみ。 (総出土箱数: 3)

図版



遺跡遠景(北西から)



委託業務(基準点測量)(西から)



作業風景(北西から)



作業風景(南西から)



調査風景(南から)

百目鬼遺跡

図版 2

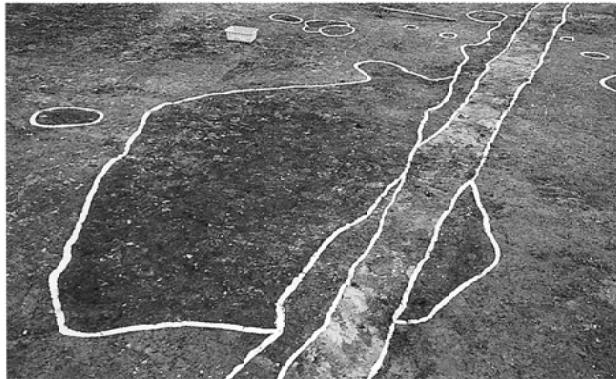


S T 1 土層断面(東から)



S T 1 完掘状況(東から)

百目鬼遺跡
図版 3



S T134検出状況(北から)



S T134土層断面(東から)



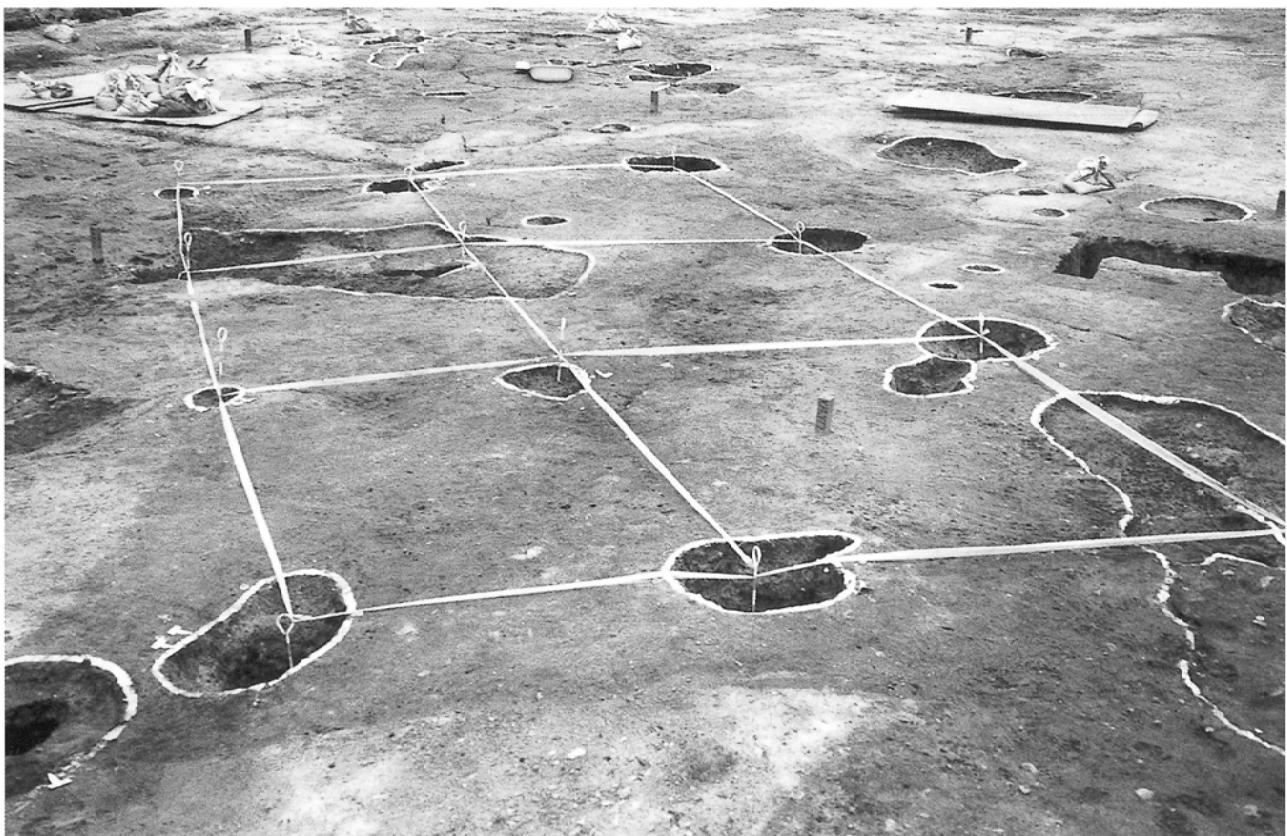
S T134・E K 1 土層断面(東から)



S T134完掘状況(北東から)

百目鬼遺跡

図版 4



S B 325完掘状況(北東から)



S B 326完掘状況(東から)

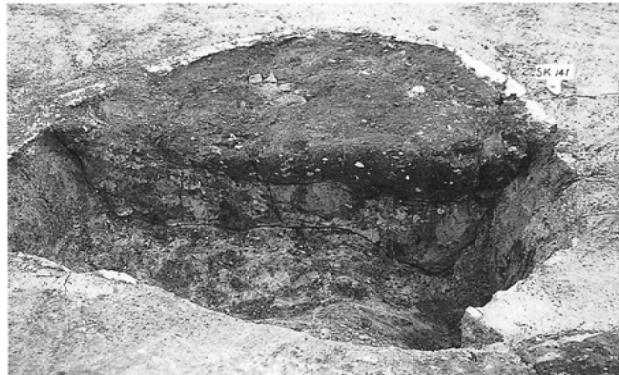


SB 327完掘状況(東から)

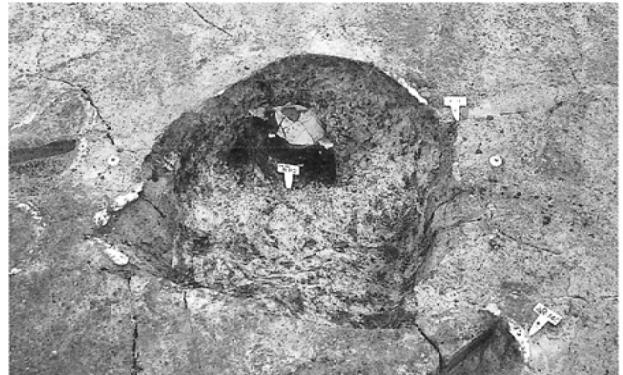


SB 328完掘状況(北西から)

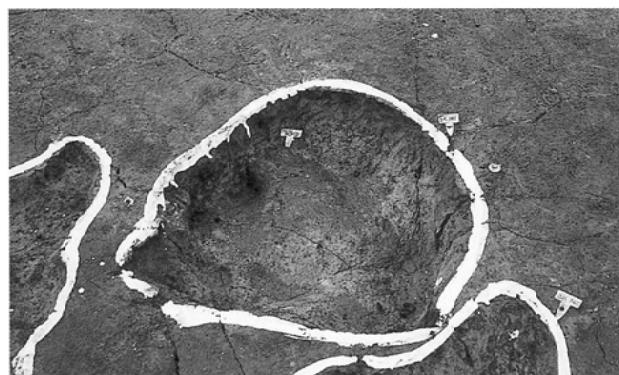
図版 6



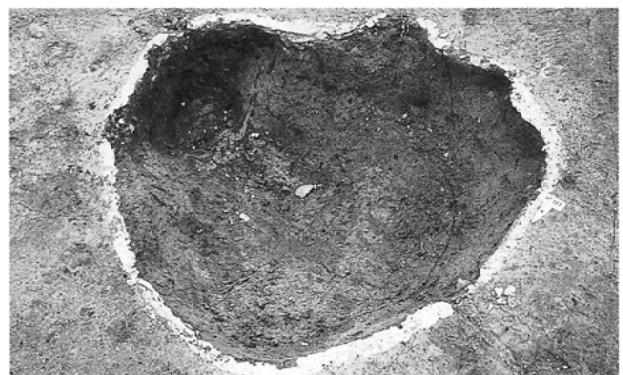
S K 141土層断面(東から)



S K 141—RP 2 出土状況(東から)



S K 141完掘状況(東から)



S K 111完掘状況(東から)



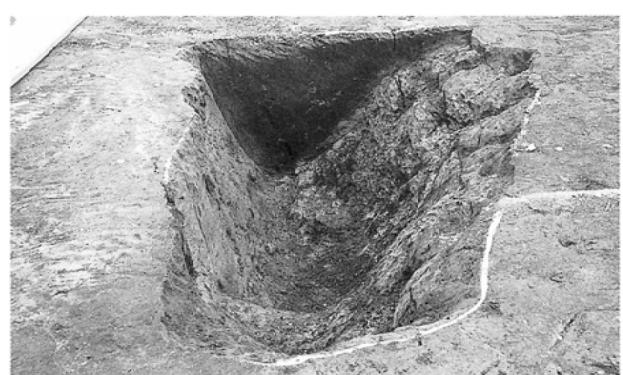
S K 122土層断面(東から)



S K 122完掘状況(東から)



S X 89土層断面(西から)



S X 89完掘状況(西から)



S K 152土層断面(南西から)



S K 152完掘状況(南から)



S K 152—R P 3 出土状況(東から)



S K 152—R P 5 出土状況(北から)



S X164 A—A'土層断面(南から)



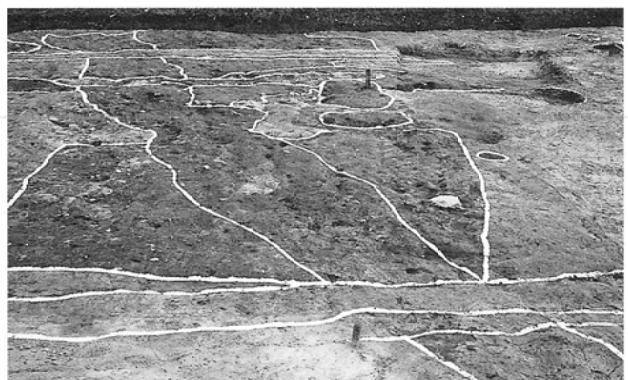
S X164 C—C'土層断面(南から)



S X164精査状況(南から)

百目鬼遺跡

図版 8



S T1・S D2・3・S K6・S X10検出状況(東から)



S X10・S D3 土層断面(南から)



S D3 土層断面(南から)



S T1・S D2・3・S K6・S X10完掘状況(東から)



SD 2 A-A'土層断面(東から)



SD 2 B-B'土層断面(東から)



SD 2 C-C'土層断面(東から)



SD 2 完掘状況(東から)

百目鬼遺跡

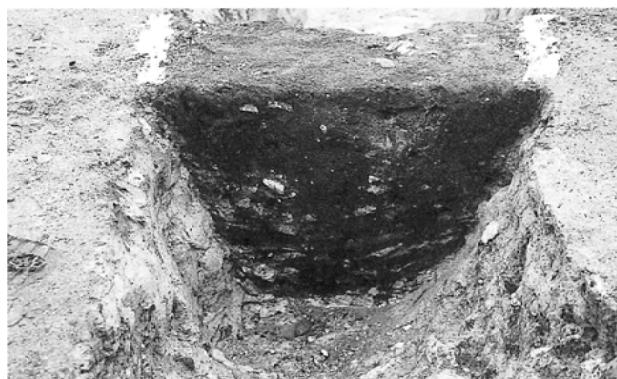
図版10



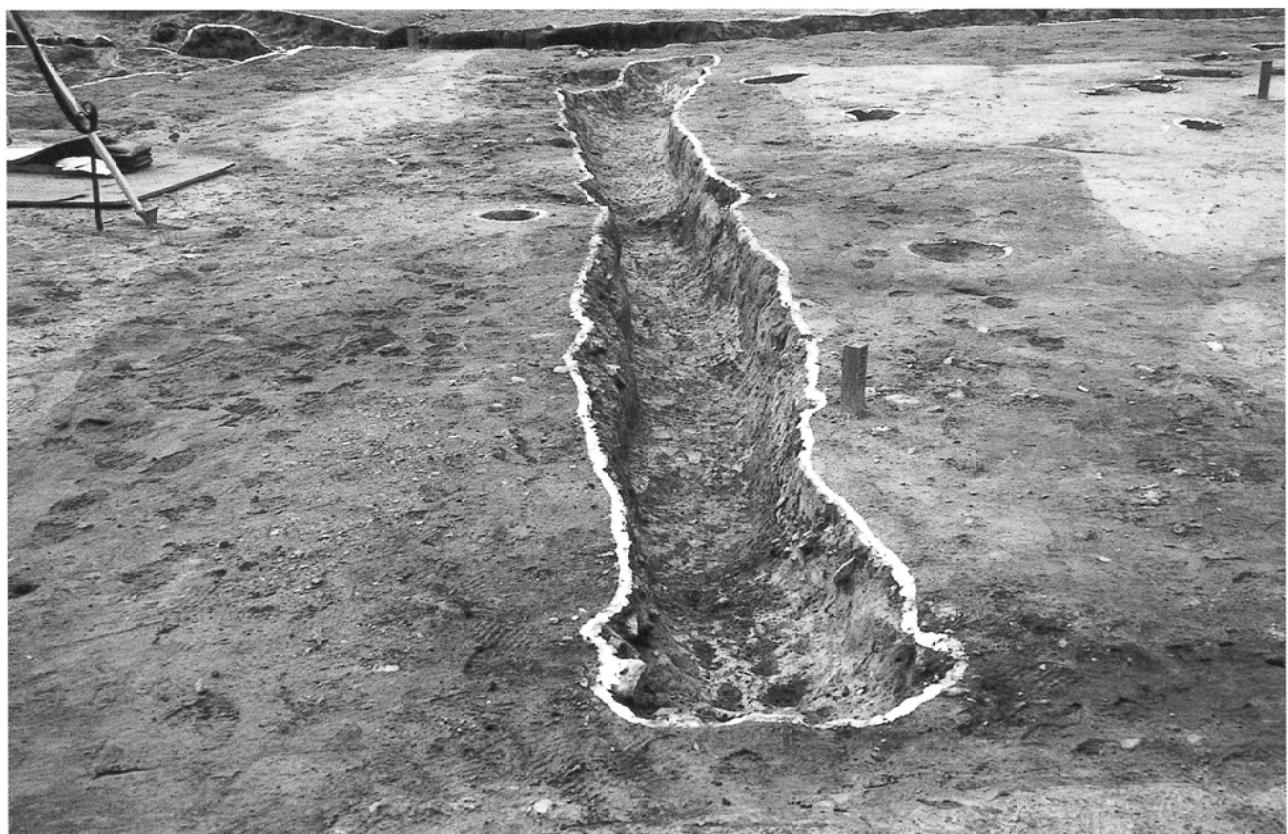
S D 30 E - E' 土層断面(南から)



S D 30 F - F' 土層断面(南から)



S D 30 G - G' 土層断面(南から)



S D 30 完掘状況(南から)



E U104検出状況(西から)



E U104土層断面(北から)



E U104完掘状況(北から)



S M323土層断面(北から)



S M323精査状況(北から)



S M323木製桶出土状況(北から)



S M323完掘状況(北から)

百目鬼遺跡

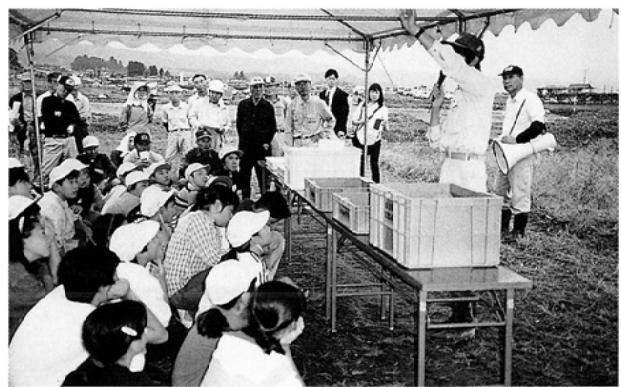
図版12



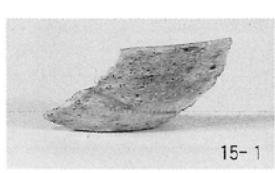
調査区全景空中写真(北から)



調査説明会



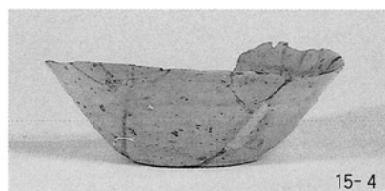
調査説明会



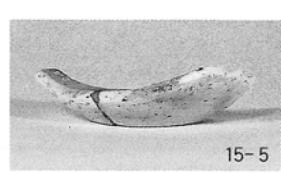
15- 1



15- 2



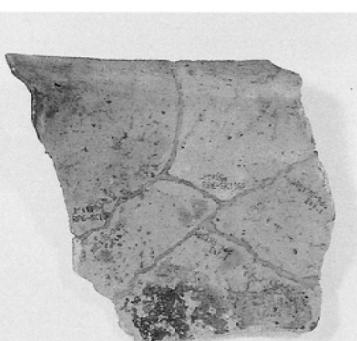
15- 4



15- 5



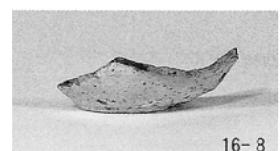
15- 3



15- 6



15- 7



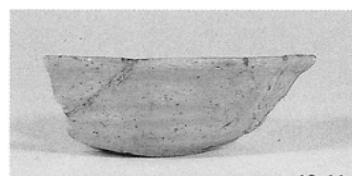
16- 8



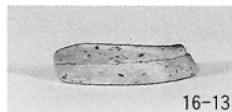
16- 9



16-10



16-11



16-13



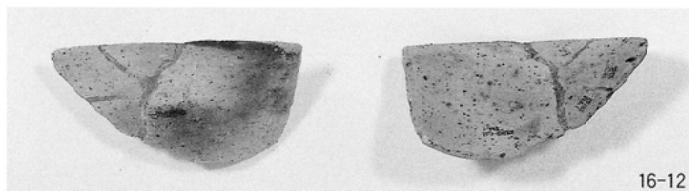
16-14



16-15



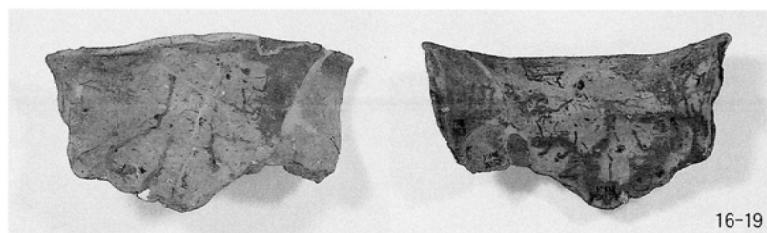
16-17



16-12

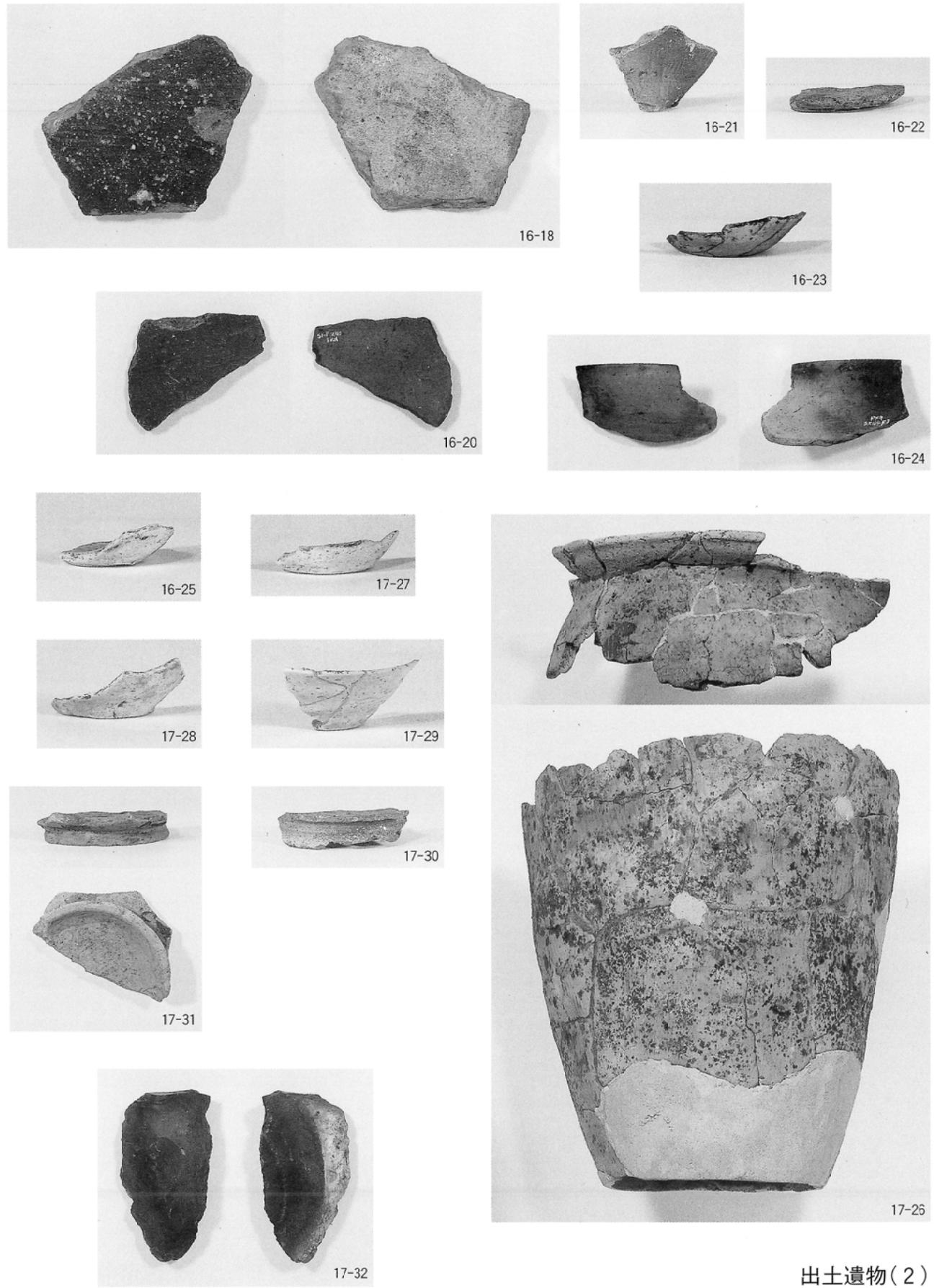


16-16



16-19

出土遺物(1)



出土遺物(2)



調査区近景(南から)



作業風景(南から)



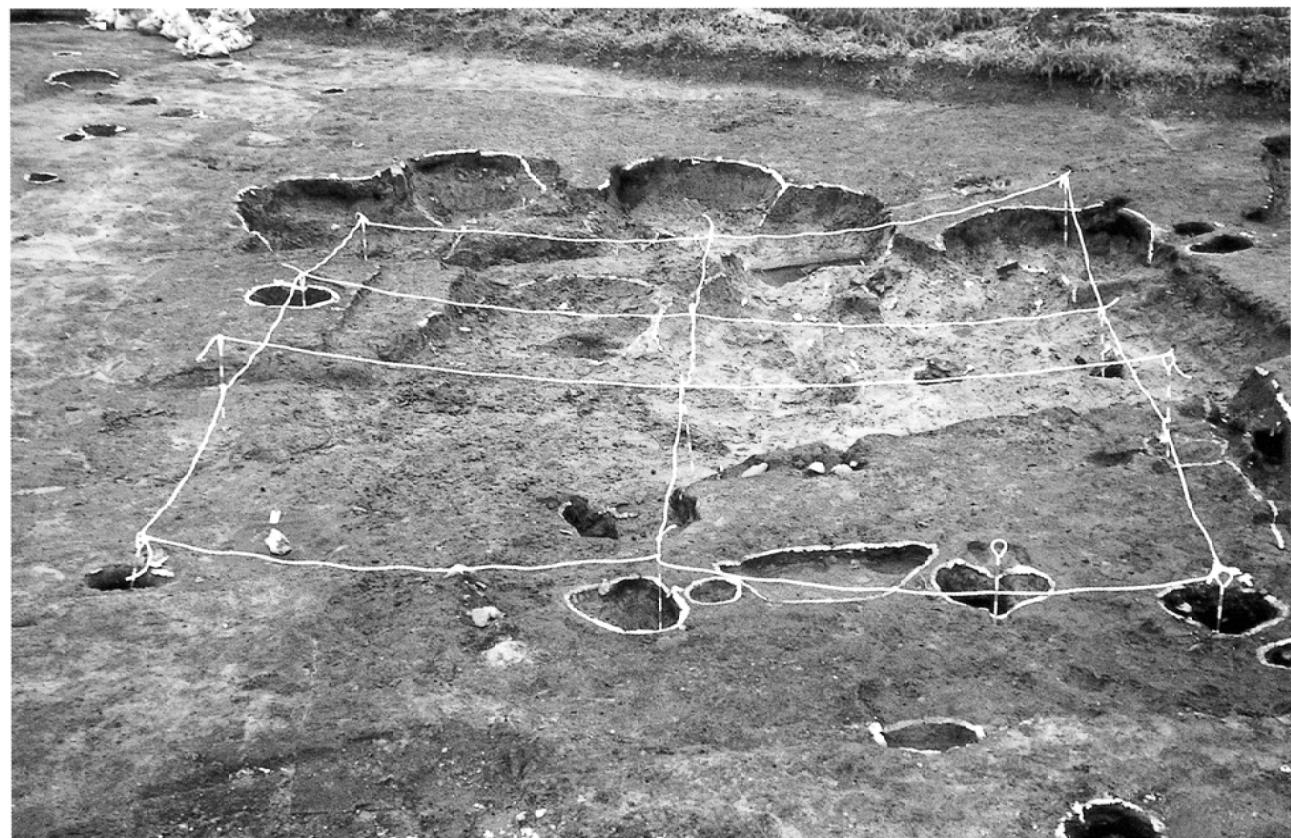
作業風景(南東から)



調査風景(北から)



調査区完掘全景(南から)



S B 95完掘状況(東から)



S K 69・S X 72土層断面(南から)



S K 69・S X 72完掘状況(東から)



S K 71遺物出土状況(北から)



S K 71-R P 1 出土状況(北東から)



S K 74土層断面(西から)



S K 74完掘状況(西から)



S X 75土層断面(西から)



S X 75完掘状況(東から)

樋渡遺跡

図版18



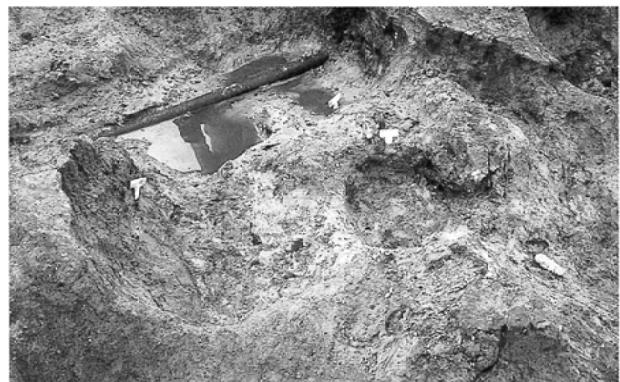
S K 78土層断面(南東から)



S K 78完掘状況(南東から)



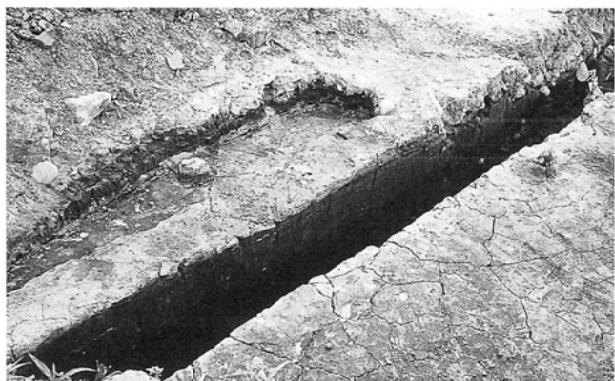
S K 88土層断面(南から)



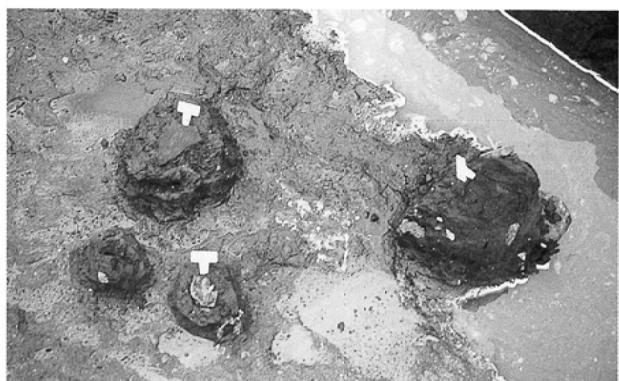
S K 88完掘状況(東から)



S K 69・71他土坑群完掘状況(東から)



SD 1 土層断面(南東から)



SD 1 遺物出土状況(北から)



SD 1 R P 8 出土状況(北東から)



SD 1 R P 9 出土状況(南東から)



SD 45 E-E' 土層断面(南から)



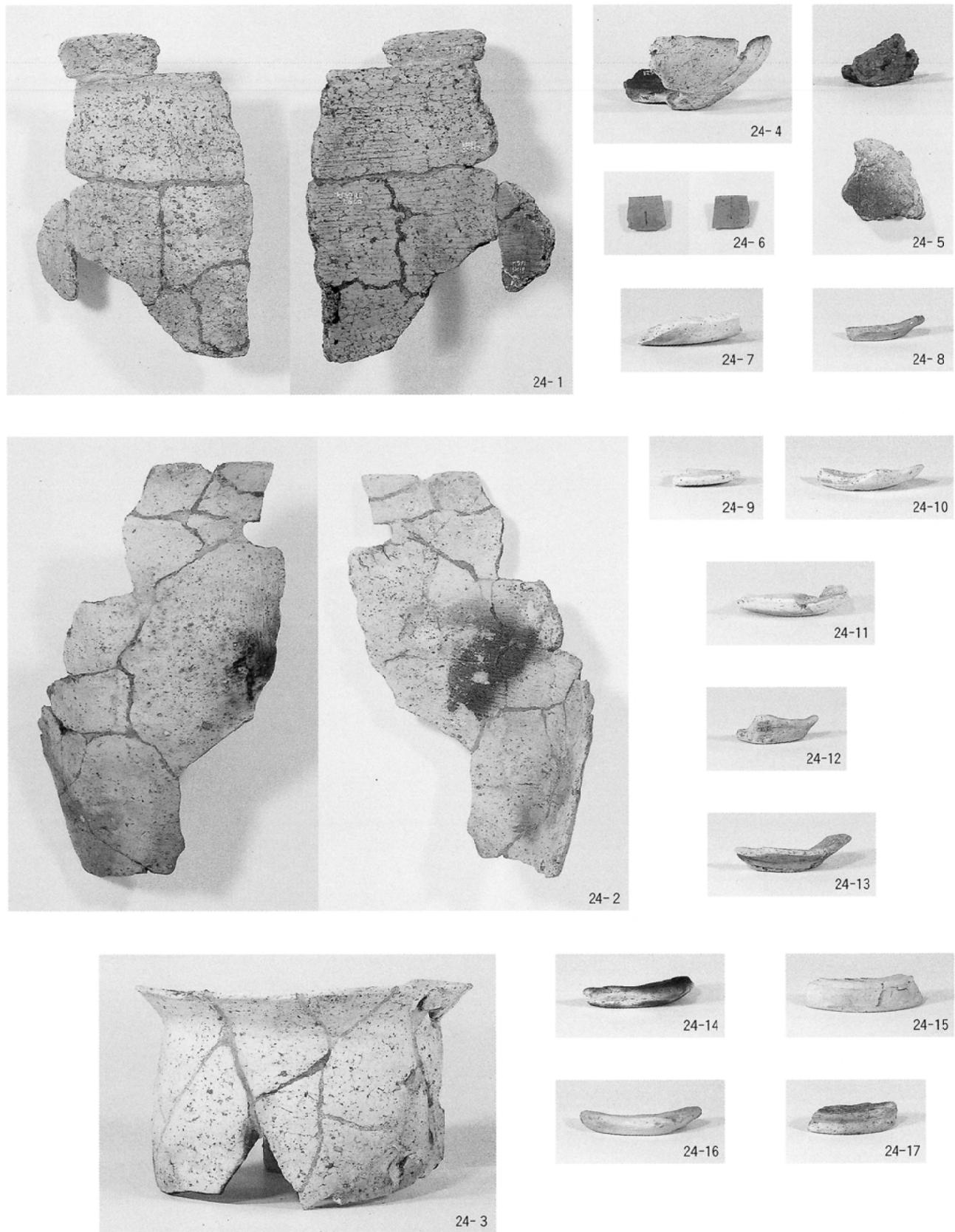
SD 45 完掘状況(南から)



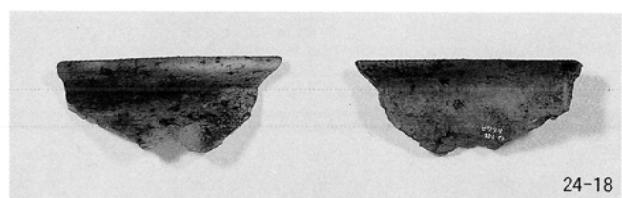
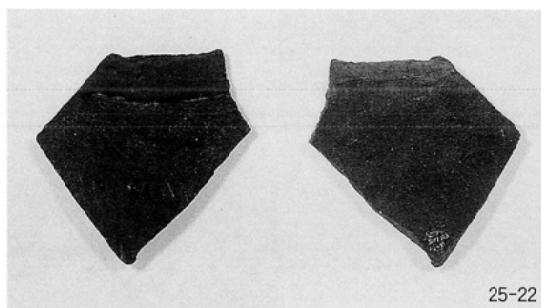
SP 66 土層断面(南から)



SP 66 柱根出土状況(南から)

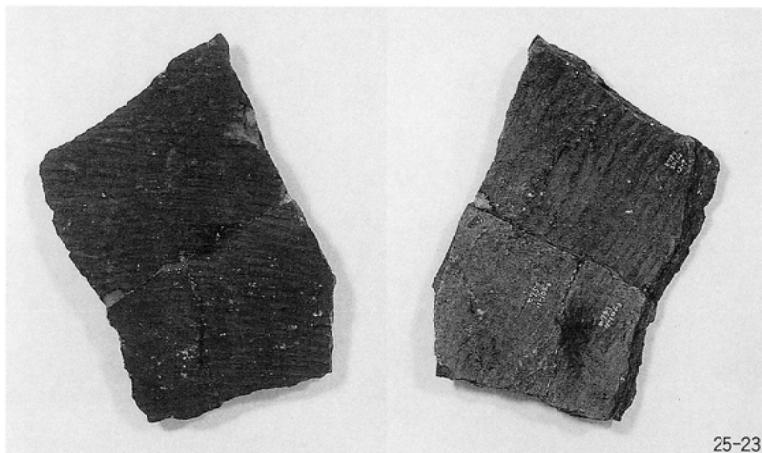


出土遺物(1)

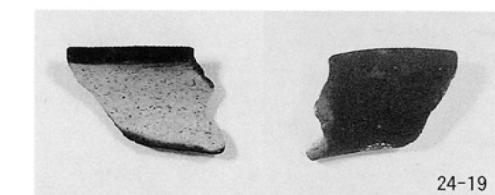


24-18

25-22



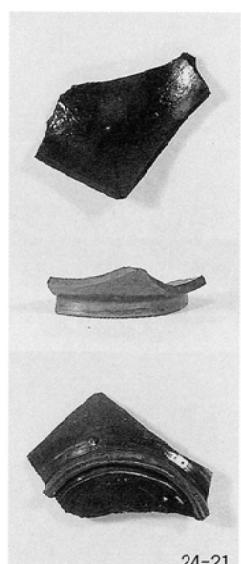
25-23



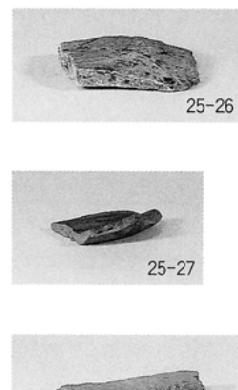
24-19



24-20



24-21



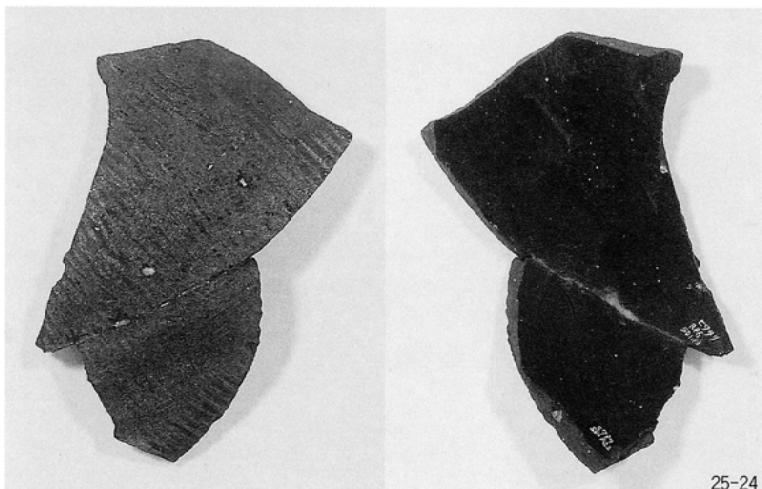
25-26

25-27



25-28

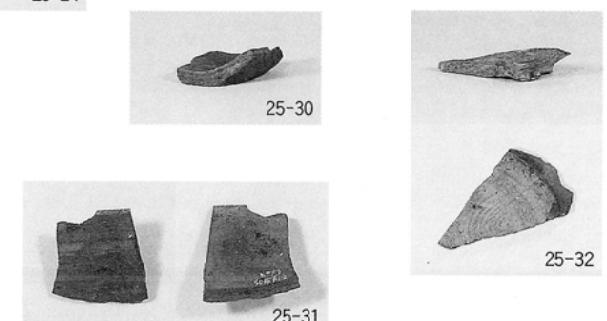
25-29



25-24



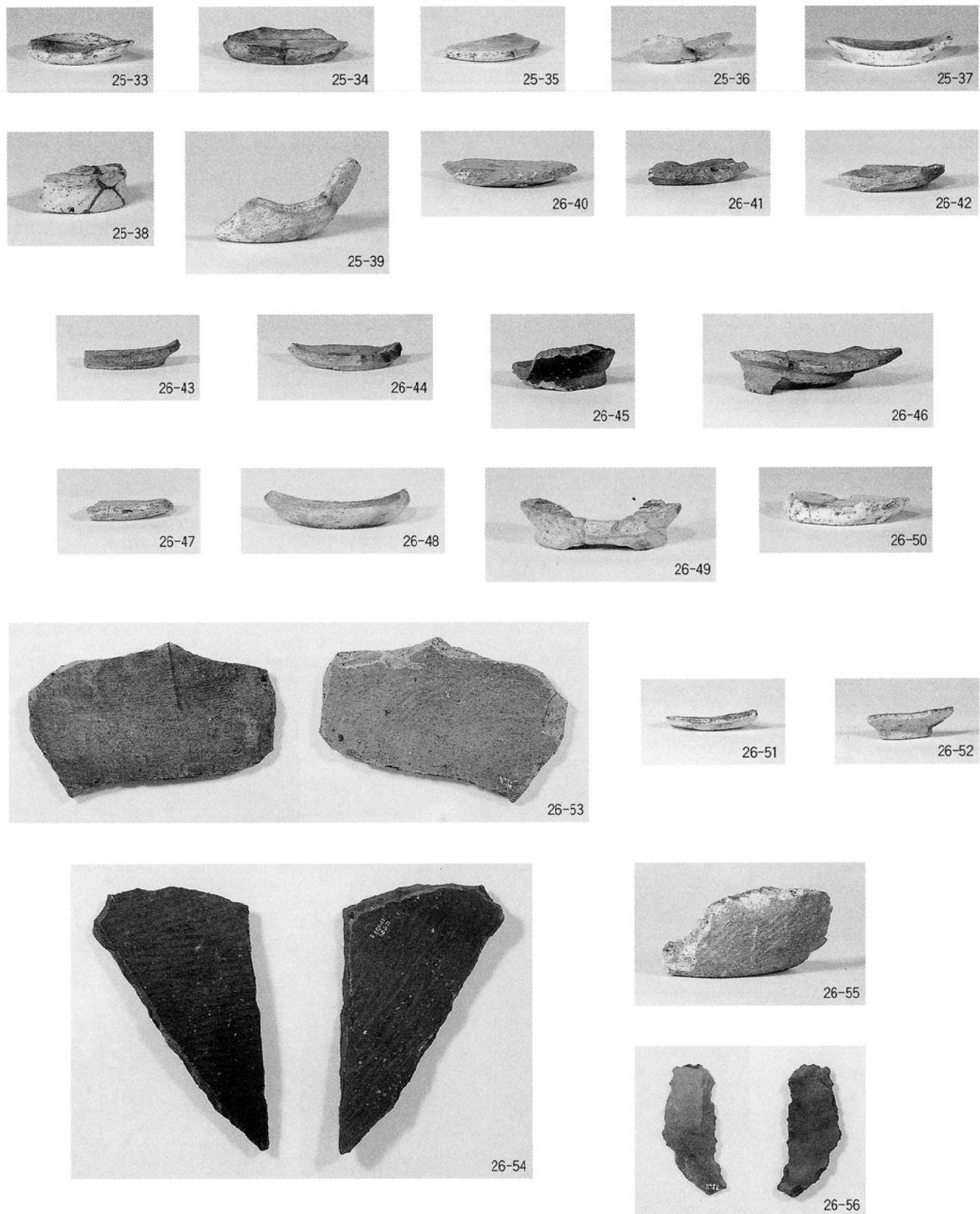
25-25



25-31

25-32

出土遺物(2)



出土遺物(3)

付 編

百目鬼遺跡の埋設土器の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百目鬼遺跡は、本沢川扇状地扇端部の微高地上に立地し、標高127mを測る。周囲には、縄文時代～奈良・平安時代の遺跡が分布している。

今回の発掘調査により、平安時代の堅穴住居跡や近世の祭祀跡などの遺構、甕や壺などの遺物が検出されている。このうち埋設土器は、土師器の甕がほぼ完形で出土した。甕は、底部を下にした立位で検出され、構築した際の掘り方も明確に認められた。その用途について、現地所見から人骨を埋納した可能性が指摘されている。

そこで、埋設土器の内容物に関する情報を得るために、人骨の主な成分であるリン酸・カルシウムの含量を測定することにした。

1. 試料

調査対象は、E U104で検出された埋設土器R P 1内の土壤である。試料として、甕内の底部、中位、上位の埋積物が採取された（試料番号1・2・3）。また、対照試料として、E U104周囲の地山3点（試料番号4・5・6）、7-14G付近の基本土層のⅢ層とⅡ層土壤2点（試料7・8）の、計8点が採取された。分析には、これら8点全点を用いた。

2. 分析方法

土壤標準分析・測定法委員会（1986）、土壤養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）を参考に、以下の工程を行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5mlを加えて、加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計により、カルシウム（CaO）濃度を測定する。

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaO mg/g）を求める。

3. 結果

表-1 埋設土器などのリン酸・カルシウム分析結果

試料	場所	層位	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)	備考
1	EU104-RP1	上層	HC	N2/0 黒	1.63	9.45	埋設土器内
2		中層	HC	N2/0 黒	2.06	8.78	埋設土器内
3		下層	HC	N2/0 黒	1.36	7.17	埋設土器内
4	12-13G	地山	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.65	3.89	EU104-RP1付近
5	11-13G	地山	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.65	4.32	EU104-RP1付近
6		地山	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.50	3.52	EU104-RP1付近
7	7-14G付近	II層	HC	2.5Y3/2 黒褐	1.71	3.79	基本層序
8		III層	LiC	10YR5/4 にぶい黄褐	0.82	3.27	基本層序

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

LiC：軽埴土（粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）

HC：重埴土（粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%）

埋設土器内の埋設物は黒色の重埴土、対照試料とした周囲の地山は暗オリーブ色の重埴土、基本層序II層は黒色の重埴土、III層はにぶい黄褐色の軽埴土であり、III層を除いて粘土含量の高い土壌である。

埋設土器内のリン酸・カルシウム含量は、地山や基本層序よりも概して高い。また、土器内のうち、リン酸含量は中層、カルシウム含量は上層で高い。

なお、基本層序のII層は下位のIII層よりもリン酸・カルシウム含量が高く、リン酸含量は埋設土器内と同等である。

4. 考察

リン酸の土壤中に普通に含まれる量、いわゆる天然賦存量は約3.0 P₂O₅mg/g程度とされ、(Bowen, 1983; Bolt · Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5 P₂O₅mg/gとの報告もある(川崎ほか)。さらに、当社におけるこれまでの分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壤で6.0 P₂O₅mg/gを越える場合が多い。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP₂O₅mg/gで統一した。これらの値を著しく越える土壤では、外的要因(おそらく人為的影響によるもの)によるリン酸の富化が指摘できる。

今回調査したEU104の埋設土器RP1埋積物や、対照試料とした地山・基本層序のリン酸含量は、天然賦存量の範囲内にある。

しかし、埋設土器内は対照試料と比較して、リン酸・カルシウム含量が高かったことから、土器内では地山や基本層序よりリン酸・カルシウム含量が富化していると言える。土器内は粘土の多い重埴土で埋積されており、土壤中の理化学成分が保持されやすかったことがうかがえ

る。また、この埋設土器はほぼ完形であり、底部を下にした立位の状態であった。これらから、土器内にはヒトを含む動物遺体が埋納され、土器内でその成分が保持されていたと考えられる。

なお、基本層序のⅡ層は、下位のⅢ層よりもリン酸・カルシウム含量が高かった。Ⅱ層はⅢ層よりも粘土分が多く含まれることから、理化学成分が保持されやすかったことがうかがえる。また、リン酸含量は埋設土器内と同等であり、リン酸成分が濃集した可能性がある。この要因としては、本層内に過去の生活面があり、人間の生活によってリン酸成分が富化したことが挙げられよう。しかし、この点については、今後平面的・空間的に試料を採取して検証してみたい。

引用文献

- ・天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壤型別蓄積リン形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」. p28~36.
- ・Bowen, H.J.M. (1983) 環境無機化学 一元素の循環と生化学一. 浅見輝男・茅野充男訳, 297 p., 博友社 [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- ・Bolt, G.H.・Bruggenwert, M.G.M. (1980) 土壤の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M (1976) SOIL CHEMISTRY], p235~236.
- ・土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法. 354p., 博友社.
- ・土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法. 440p., 養賢堂.
- ・川崎 弘・吉田 澄・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p. 23~27.
- ・京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻. 411p., 産業図書.
- ・農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ・ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p, : p. 39~40.

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第96集

ど
百
め
目
鬼
き
遺
跡
ひ
樋
わたり
渡
遺
跡
発
掘
調
査
報
告
書

2002年3月25日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301

印刷 大場印刷株式会社
